

堀
辰雄

美しい村



美しい村

天の瀬氣ことうきの薄明うすあかりに優えしく会釈しやくをしようとして、
命の脈がまた新しく活澆かっぱつに打っている。
こら。下界。お前はゆうべも職を曠むなしゆうしなかった。
そしてけさ疲つかれが直って、己の足の下で息をしている。
もう快樂を以て己を取り巻きはじめる。
断たえず最高の存在へと志ざして、
力強い決心を働かせているなあ。

ファウスト第二部

序 曲

六月十日 K：村にて

御無沙汰をいたしました。今月の初めから僕は当地に滞在しております。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来てみたいものだと言っていました。が、やっと今度、その宿望がかなった訣わけです。まだ誰も来ていないので、淋さびしいことはそりあ淋しいけれど、毎

日、気持のよい朝夕を送っています。

しかし淋しいとは言っても、三年前でしたか、僕が病気をして十月ごろまでずっと一人で滞在していたことがありましたね、あの時のような山の中の秋ぐちの淋しさとはまるで違うように思えます。あのときは籐とうのステツキにすぐるようにして、宿屋の裏の山径やまみちなどへ散歩に行くと、一日ごとに、そこいらを埋めている落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無気味な色をした茸きのこがちらりと覗いていたり、あるいはその上を赤腹（あのなんだか人を莫迦ばかにしたような小鳥です）

なんぞがいかにも横着そうに飛びまわっているきりで、ほとんど^{ひとけ}人気はないのですが、それでいて何だかそこら中に、人々の立去った跡にいつまでも漂っている一種のにおいのようなもの、——ことにその年の夏が一きわ花やかで美しかっただけ、それだけその季節の過ぎてからの何とも言えぬ佗びしさのようなものが、いわば凋落^{ちようらく}の感じのようなものが、僕自身が病後だったせいか、一層ひしひしと感じられてならなかったのですが、（——もつとも西洋人はまだかなり残っていたようです。ごく稀^{まれ}にそんな山径で行き逢いますと、なんだか病み上がり

の僕の方を胡散うさんくさそうに見て通り過ぎましたが、それは僕に人なつかしい思いをさせるよりも、かえってへんな佻たうびしさをつのらせました……)——そんな佻たうびしさがこの六月の高原にはまるでないことが何よりも僕は好きです。どんな人気のない山径を歩いていても、一草一木ことごとく生き生きとして、もうすっかり夏の用意ができ、その季節の来るのを待っているばかりだと言った感じがみなぎっています。山鶯やまうぐいすだの、閑古鳥かんこどりだのの元もと気もとよく囀さえずることといたたら! すこし僕は考えごとがあるんだから黙っていてくれないかなあ、と癩癩かんしやくを起

したくなるくらいです。

西洋人はもうぽつぽつと来ているようですが、まだ別荘などは大概閉とぎされています。その閉されているのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は気に入った恰好かっこうの別荘があるのを見つけると、構かまわずその庭園の中へは行って行って、そここのヴェランダに腰を下ろし、煙草たばこなどをふかしながら、ぼんやり二三時間考えごとをしましたりします。たとえば、木の皮茸かわぶきのバンガロオ、雑草の生い茂った庭、藤棚ふじだな（その花がいまちようど見事に咲い

ています）のあるヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる^{もみ}縦や^{からまつ}落葉松の林、その林の向うに見えるアルプスの山々、そういったものを背景にして、一篇の小説を構想したりなんかしているんです。なかなか好い気持です。ただ、すこしばんやりしていると、まだ生れたての小さな^{ぶよ}蚋が僕の足を襲ったり、毛虫が僕の帽子に落ちて来たりするので閉口です。しかし、そういうものも僕には自然の僕に対する敵意のようなものとしては考えられません。むしろ自然が僕に対してうるさいほどの好意を持っているような気さえします。僕の足もとになど、よく小

さな葉っぱが海苔卷のりまきのように卷かれたまま落ちています
が、そのなかには芋虫いもむしの幼虫が包まれているんだと思う
と、ちよつとぞつとします。けれども、こんな海苔卷の
ようなものが夏になると、あの透明な翅はねをした蛾がになる
のかと想像すると、なんだか可愛らしい気もしないこと
はありません。

どこへ行っても野薔薇のばらがまだ小さな硬かたい白つばみい蕾つぼみをつ
けています。その咲くのが待ち遠しくてなりません。
これがこれから咲き乱れて、いいにおいをさせて、それ
からそれが散るころ、やっと避暑客たちが入り込んでく

ることでしょう。こういう夏場だけ人の集まってくる高原の、その季節に先立って花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散って行ってしまふさまざまな花（たとえばこれから咲こうとする野薔薇もそうだし、どこへ行っても今を盛りに咲いている躑躅つっじもそうです）——そういう人馴れない、いかにも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思う存分に愛玩あいがんしようという気持は（なぜなら村の人々はいま夏場の用意に忙しくて、そんな花なぞを見てはいられませんから）何ともいえずに爽さわやかで幸福です。どうぞ、都会にいたたまれ

ないでこんな田舎暮らしをするようなことになっている
僕を不幸だとばかりお考えなさらしないで下さい。

あなた方はいつ頃こちらへいらっしやいますか？ 僕
はほとんど毎日のようにあなたの別荘の前を通ります。
通りすがりにちよっとお庭へはいつてあちらこちらを歩
きまわることもあります。昔はあんなに草深かったのに、
すっかり見ちがえるくらい、きれいな芝生しばふになってしま
いましたね。それに白い柵さくなどをおつくりになつたりし
て。……何んだかあなたの別荘のお庭へはいつても、ま
るで他の別荘の庭へはいつているような気がします。人

に見つけられはしないかと、心臓がときどきして来てな
りません。どうしてこんな風にお変えになつてしまつた
のか、本当におうらめしく思います。ただ、あなたとそ
こでよくお話したことのあるヴェランダだけは、そつく
り昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しそうな様子をしてしま
つた。しかし、僕は本当はそんなに悲しくはないんです
よ。だって僕は、あなた方さえ知らないような生の愉悅
を、こんな山の中で人知れず味っているんですもの。で
も一体、いつごろあなた方はこちらへいらっしやるのか

しら？　あなた方とはじめて知り合いになったこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のように顔を合せたりするのは、たいへんつらいから、僕はあなた方のいらっしやる前に、この村を出発しようかと思えます。どうぞその日の来るまで僕にもここにいることを、そしてときどき誰も見ていないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しそうな様子をするんだ！　もう、止めます。しかし、もうすこし書かせて下さい。でも、何を書いたものかしら？　僕のいま起居しているのはこ

の宿屋の奥の離れです。御存知でしょう？ あそこを一人で占領しています。縁側から見上げると、丁度、母屋の藤棚が真向うに見えます。さつきもいったように、その花がいま咲き切っているんです。が、もう盛りもすぎたと見え、今日きょうあたりは、風もないのにぼたぼたと散りこぼれています。その花に群がる蜜蜂うなといったら大したものです。ぶんぶんぶん唸うなっています。——この手紙を書きながら、ちよつと筆を休めて、何を書こうかなと思って、その藤の花を見上げながらぼんやりしていると、なんだか自分の頭の中の混乱と、その蜜蜂のうなり

とが、ごっちゃになって、そのぶんぶんいつているのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな気がしてくるくらいです。僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエツトの「クレエヴ公爵夫人」が読みかけのまんま頁ペエジをひらいています。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ読んでいますが、そのお蔭かげでだいぶ僕も今日このごろの自分の妙に切迫した気持から救われているような気がしています。この小説についてはあなたに一番その読後感をお書きしたいし、また黙ってもいたい。二三年前、あなたに無理矢理にお読ませした、ラジイゲの「舞踏会」

は、この小説をお手本にしたと言われているくらいですから、まあ、あれにたいへん似ています。しかし「舞踏会」のときは、まだあんなにこだわらずに、その本をお貸しが出来たけれど、そしてそれをお読みになってもあなたは何もおっしやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊ききしなかつたが、それでも或ある気持はお互いに通じ合っていたようでしたけれど、いま僕は、あの時のようにこだわらずに、この小説の読後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたって、筆をとりながら、はたし

てあなたに出せるものやら、出せそうもないものやら、
心の中では躊躇ためらっているのです。おそらく出さずにしま
うかも知れません。……こんなことを考え出したら、も
うこの手紙を書き続ける気がしなくなりました。もう筆
を置きます。出すか出さないか分りませんが、とも
かくも左様なら。

美しい村

或は 小遁走曲

ある小高い丘の頂きにあるお天狗てんぐ様のところまで登つてみようと思つて、私は、去年の落葉ですっかり地肌じはだの見えないほど埋まっているやや急な山径をガサガサと音させながら上つて行つたが、だんだんその落葉の量が増して行つて、私の靴がその中に気味悪いくらい深く入るようになり、腐った葉の湿り気がその靴のなかまで滲しみ

込んで来そうに思えたので、私はよっぽどそのまま引つ返そうかと思つた時分になつて、雑木林の中からその見棄てられた家が不意に私の目の前に立ち現れたのであつた。そうしてその窓がすっかり釘くぎづけになつていて、その庭なんぞもすっかり荒れ果て、いまにも壊れこわそうな木戸が半ば開かれたままになっているのを認めると、私は子供らしい好奇心で一ぱいになりながらその庭の中へずかずかと這はい入いつて行つた。

そうして一めに生い茂つた雑草を踏ふみ分けて行くうちに、この家のこうした光景は、数年前、最後にこれを

見た時とそれが少しも変っていないような気がした。が、それが私の奇妙な錯覚であることを、やがて私のうちによみがえ蘇よみがえって来たその頃の記憶がめいりよう明瞭めいりようにさせた。今はこんなにも雑草が生い茂ってほとんど周囲の雑木林と区別がつかないくらいにまでなってしまうているこの庭も、その頃は、もっと庭らしく小綺麗になっていたことを、ようやく私は思い出したのである。そうしてつい今しがたの私の奇妙な錯覚は、その時からすでに経過してしまつた数年の間、もしそれがそのままに打棄うつちやられてあつたならば、おそくはこんな具合にもなっているであろう

に……という私の感じの方が、その当時の記憶が私に蘇るよりも先きに、私に到着したからにちがいがいなかった。しかし、私のそういう性急せっかちな印象が必ずしも贗にせではなかったことを、まるでそれ自身裏書きでもするかのようにな、私のまわりには、この庭を一面に掩おおうて草木が生い茂るがままに生い茂っているのであった。

そこのヴェランダにはじめて立った私は、錯雑もみした椏もみの枝を透して、すぐ自分の眼下に、高原全帯が大きな円を描きながら、そしてここかしこに赤い屋根だの草屋根だのを散らばらせながら、横わっているのを見下ろすこ

とが出来た。そうしてその高原の尽つきるあたりから、また、他のいくつもの丘が私に直面しながら緩ゆるやかに起伏していた。それらの丘のさらに向うには、遠くの中央アルプスらしい山脈が青空に幽かすかに爪つめでつけたような線を引いていた。そしてそれが私のきざきざな地平線をなしているのだった。

夏ごとにこの高原に来ていた数年前のこと、これとほとんどそっくりな眺望を楽しむために、私はしばしば、ここからもう少し上方にあるお天狗てんぐ様まで登りに来たのだけれど、そのたびごとに、この最後の家の前を通り過

ぎながら、そこに毎夏のようにいつも同じ二人の老嬢が
住まっているのを何んとなく気づかわしげに見やっ
ては、その二人暮らしに私はひそかに心をそそられたもの
だった。——だが、あれはひよつとすると私自身の悲し
みを通してばかり見ていたせいかも知れないぞ？（と私
は考えるのだった。）なぜって、私がこの丘へ登りに来
た時は、いつも私に何か悲しいことがあって、それを肉
体の疲労と取り換えたためだったからな。真白な名札
が立って、それには *MISS* のついた苗字みょうしが二つ書いてあ
ったっけ。……そう、その一方が確か *MISS SEYMORE*

という名前だったのを私は今でも覚えている。が、もう一方のは忘れた。そうしてその老嬢たちそのものも、その一方だけは、あの銀色の毛髪をして、何となく子供子供した顔をしていた方だけは、今でも私の眼にはつきりと浮んでくるけれど、もう一方のはどうしても思い出せない。昔から自分の気に入ったタイプの人物にしか関心しようとしないうち自分の習癖が、（この頃ではどうもそれが自分の作家としての大きな才能の欠陥のように思われてならないのだけれど）この老嬢たちにも知らず識しらずの裡うちに働いていたものと見える。

……この数年間というもの、この高原、この私の少年時の幸福な思い出と言えばそのほとんど全部がここに結びつけられているような高原から、私を引き離していた私の孤独な病院生活、その間に起ったさまざまな出来事、忘れがたい人々との心にもない別離、その間の私の完全な無為。……そして、その長い間放擲ほうてきしていた私の仕事を再び取り上げるために、一人きりにはなりたくないし、そうかと言っいなかてあんまり知らない田舎へなぞ行ったら淋しくてしようがあるまいからと言った、例の私の不決断な性分から、この土地ならそのすべてのものが私にさまざま

まな思い出を語ってくれるだろうし、そして今時分ならまだ誰にも知った人には会わないだろうしと思つて、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわざわざ私はやって来たのであった。が、数日前にこの土地へ到着してから私の見聞きする、あたかも私のそういう長い不在を具象するような、この高原におけるさまざまに思いがけない変化、それにつけても今更のように蘇つて来る、この土地ではじめて知り合いになったある女友達との最近の悲しい別離。……

そんな物思いに耽^{ふけ}りながら、私はぼんやり煙草を吹か

したまま、ほとんど私の真正面の丘の上に聳そびえている、西洋人が「巨人の椅子」という綽あだな名をつけているところの大きな岩、それだけがあらゆる風化作用から逃のがれて昔からそっくりそのままに残っているかに見える、どっしりと落着いた岩を、いつまでも見まもっていた。

私はやがて再び枯葉をガサガサと音させながら、山径を村の方へと下りて行った。その山径に沿うて、落葉松からまつなどの間にちらほらと見える幾つかのバンガロオも大概はまだ同じような紅殻べにがら板を釘づけにされたままだった。ときおり人夫らがその庭の中で草むしりをしていった。彼

らの中には熊手を動かしていた手を休めて私の方を胡散うさん臭そうに見送る者もあった。私はそういう気づまりな視線から逃れるために何度も道もないようなところへ踏み込んだ。しかしそれは昔私の大好きだった水車場のほとりを目ざして進んでいた私の方向をどうにかこうにか誤らせないでいた。しかしそこまで出ることは出られたが、数年前までそこにごとごとと音立てながら廻っていた古い水車はもう跡方もなくなっていた。それよりももっと悲しい気持になって私を見出したのは、その水車場近くの落葉松を背にした一つのヴィラだった。私のしばしば

訪れたところのそのヴィラは、数年前に最後に私の見た時とはすっかり打って変っていた。以前はただ小さな灌木かんぼくの茂みで無雑作に縁どられていたその庭園は、今は白い柵さくできちんと区限くぎられていた。私はふとなぜだか分らずにその滑らかそうな柵たなをいじくろうとして手をさし伸べたが、それにはちよつと触れただけであった。そのとき私の帽子の上になんだか雨滴のようなものがぽたりと落ちて来たから。そこでその宙に浮いた手を私はそのまま帽子の上に持って行った。それは小さな桜の実であった。私がひよいと頭を持ち上げた途端に、そこには、

ちようど私の頭上に枝を大きく^{ひろ}拡げながら、それがあんまり高いのでかえって私に気づかれずにいた、それだけが私にとっては昔^{なじみ}馴染の桜の老樹が見上げられた。

やがて向うの灌木の中から背の高い若い外国婦人が乳母車を押しながら私の方へ近づいて来るのを私は認めた。私はちつともその人に見覚えがないように思った。

私はその道ばたの大きな桜の木に身を寄せて道をあけていると、乳母車の中から^{あま}亜麻色の毛髪をした女の児が私の顔を見てにつこりとした。私もつい釣り込まれて、につこりとした。が、乳母車を押ししていたその若い母は私

の方へは見向きもしないで、私の前を通り過ぎて行つた。それを見送っているうち、ふとその鋭い横顔から何んだか自分も見たことがあるらしいその女の若い娘だった頃の面影が透かしのようになつて来そうになつた。

私はその白い柵のあるヴィラを離れた。私の帽子の上に不意に落ちて来た桜の実が私のうちに形づくり、拵げかけていた悲しい感情の波紋を、今しがたの氣づまりな出会であいがすっかり掻かき乱してしまつたのを好い機会にして。

私は村はずれの宿屋に歸つて来た。私がその宿屋に滞

在するたびにいつも私にあてがわれる離れの一室。同じように黒ずんだ壁、同じような窓枠、その古い額縁の中にはいつて来る同じような庭、同じような植込み、……ただそれらの植込みに私の知っている花や私の知らない花が簇むらがり咲いているのが私には見馴れなかった。それはそれでまた私を侘びしがらせた。母屋の藤棚から、風の吹くごとに私のところまでその花の匂がして来た。その藤棚の下では村の子供たちが輪になって遊んでいた。私はその子供たちの中に昔よく遊んでやったことのある宿屋の子供がいるのを認めた。そのうちに他の子供たち

は去った。そしてその子供だけがまだ地面に跣こんだまま一人で何かして遊んでいた。私はその子の名前を呼んだ。その子はしかし私の方を振り向こうともしなかった。それほど自分の遊びに夢中になっているように見えた。私がかもう一度その名前を呼ぶと、やっとその子はうす汚よれた顔を上げながら私に言った。「太郎ちゃんはどこにいるか知らないよ」——私はその時初めてその小さな子供は私の呼んだ男の子の弟であるのに気がついたのだ。しかし何という同じような顔、同じような眼差まなざし、同じような声。……しばらくしてから「次郎！　次郎！」と呼び

ながら、一人の、ずっと大きな、見知らない男の子が庭へ這入^{はい}って来るのを私は見た。ようやく私になついて私の方へ近づいて来そうになつたその小さな弟は、それを聞くと急いでその方へ駈けて行つてしまった。私の方では、その大きな見知らないような男の子が昔私と遊んだことのある子供であるのをやつと認め出していた。しかし、その生意気ざかりの男の子は小さな弟を連れ去りながら、私の方をば振り向こうともしなかつた。

*

私は毎日のように、そのどんな隅々までもよく知って
いるはずだった村のさまざまな方へ散歩をしに行つた。
しかしどこへ行つても、何物かが附加えられ、何物かが
欠けているように私には見えた。その癖くせ、どの道の上で
も、私の見たことのない新しい別荘の蔭に、一むれの灌
木が、私の忘れていた少年時の一部分のように、私を待
ち伏せていた。そうしてそれらの一むれの灌木そつくり
にこんがらかったまま、それらの少年時の愉たのしい思い出
も、悲しい思い出も私に蘇よみがえって来るのだった。私はそれ

らの思い出に、あるいは胸をしめつけられたり、あるいは胸をふくらませたりしながら歩いてきた。私は突然立ち止まる。自分があんまり村の遠くまで来すぎてしまっているのに気がついて。——そんなみちみち私の出遇うのは、ごく稀まれには散歩中の西洋人たちもいたが、大概、枯枝を背負ってくる老人だとか蕨わらびとりの帰りらしい籃かごを腕にぶらさげた娘たちばかりだった。それらのものはしかし、私にとってはその村の風景のなかに完全に雑まじり込んで見えるので、少しも私のそういう思い出を邪魔しなかつた。もつとも時たま、ある時は私があんまり子供

らしい思い出し笑いをしているのを見て、すれちがいざまいきなり私に声をかけて私を愕おどろかせたり、またある時は向うから私に微笑ほほえみかけようとして私の悲しげな顔を見てそれを途中で止めてしまうようなこともあるにはあつたが……。

そんな風に思い出に導かれるままに、村をそんな遠くの方まで知らず識しらず歩いて来てしまった私は、今更のようになんか健康になつたものだなあ、と思つた。私はそういう長い散歩によつて一層生き生きした呼吸をしている自分自身を見出した。それにこの土地に滞在してか

らまだ一週間かそこいらにしかならないけれど、この高原の初夏の気候が早くも私の肉体の上にも精神の上にもある影響を与え出していることは否^{いな}めなかった。夏はもうどこにでも見つけられるが、それでいてまだどこという的^{あて}もないでいると言ったような自然の中を、こうしてさ迷いながら、あちこちの灌木の枝には注意さえすれば無数の荅^{つぼみ}が認められ、それらはやがて咲き出すだろうが、しかしそれらは真夏の季節^{シーズン}の来ない前に散^そってしまふような種類の花ばかりなので、それらの咲き揃^{そろ}うのを楽しむのは私一人だけであろうと言う想像なんかをして

いると、それはこんな淋しい田舎暮しのような高価な犠牲を払うだけの値は十分にあると言っていていいほどな、人知れぬ悦楽のように思われてくるのだった。そうして私はいつしか「田園交響曲」の第一楽章が人々に与える快い感動に似たもので心を一ぱいにさせていた。そうして都会にいた頃の私はあんまり自分のぼんやりした不幸を誇張し過ぎて考えていたのではないかと疑い出したほどだった。こんなことなら何もあんなにまで苦しまなくともよかったのだと私は思いもした。そうして最近私を苦しめていた恋愛事件をそっくりそのままに書いてみた

ら、その苦しみそのものにも気に入るだろうし、私にはまだよく解らずにいる相手の気持もいくらか明瞭はっきりしはしないかと思つて、かえつてそういう私自身の不幸をあてにして仕事をしに来た私は、ために困惑したほどであつた。私はてんでもうそんなものを取り上げてみようという気持すらなくなつてしまつたのだ。で、私は仕事の方はそのまま打棄うっちゃらかして、毎日のように散歩ばかりしていた。そうして私は私の散歩区域を日ごとに拡げて行つた。

ある日私がそんな散歩から帰って采ると、庭掃除をしていた宿の爺じいやに呼び止められた。

「細木さんはいつ頃こちらへお見えになります？」
「さあ、僕、知らないけれど……」

それは私が何日頃この地を出発するかを聞いたのと同じことであるのに爺やは気づきようがなかったのだ。

「去年お帰りになるとき」と爺やは思い出したように言った。「庭へ羊齒しだを植えて置くようにと言われたんですが、どこへ植えろとおっしやっただか、すっかり忘れてしまいましたもんで……」

「羊歯をね」私は鸚鵡おうむがえしに言った。それから私は例の白い柵に取り囲まれたヴィラを頭に浮べながら、「あの白い柵はいつ出来たの？」と訊きいた。

「あれですか……あれは一昨年でした」

「一昨年ね……」

私はそれっきり黙っていた。爺おややのいじくっている植木の一つへ目をやりながら。それからやっとそれに白い花らしいものの咲いているのに気がつきながら訊いた。

「それは何の花だい？」

「これはシャクナゲです」

「シヤクナゲ？　ふうん、そう言えば、じいやさん、このへんの野薔薇はいつごろ咲くの？」

「今月の末から、まあ、来月の初めにかけてでしょうな」

「そうかい、まだだいぶあるんだね。——一体、どのへんが多いんだい？」

「さあ……あのレエノルズさんの病院の向うなんか……」

「ああ、じゃ、あそこかな、あの絵葉書にあった奴は。……」

その翌朝は、霧がひどく巻いていた。私はレエンコートをひっかけて、まだ釘づけにされている教会の前を通り、その裏の椽とちの林の中を横切って行った。その林を突き抜けると、道は大きく曲りながら一つの小さな流れに沿うて行った。しかしその朝はその流れは霧のためにちつとも見えなかった。そしてただ、せせらぎの音ばかりが絶えず聞えていた。私はやがて小さな木橋を渡った。それからその土手道は、こんどは今までとは反対の側を、その流れに沿うて行くのであった。さて、その土手道へ

差しかかろうとした途端、私はふと立ち止まった。私の行く手に何者かが異様な恰好かつこうでうずくまっているのが仄ほの見えるので。その異様なものは、霧のなかで私自身から円光のように発しているかに見える、私を中心にして描いた円状の薄明りの、ちょうどその円周の上にうずくまっているのだった。しかし霧は絶えず流れているので、ある時は一層濃いのが来てその人影をほとんど見えなくさせるが、やがてそれが薄らいで行くにつれてその人影も次第にはつきりしてくる。漸々とそれが蝙蝠傘こうもりがさの下で、ある小さな灌木の上に気づかわしげに身を跼こごめている、

西洋人らしいことが私には分かり出した。もつと霧が薄らいだとき、私はその人の見まもっているのが私の見たいと思っていた野薔薇の木らしいことまで分かった。向うでは私のことに気づかないらしかった。そのため、誰にも見られていないと信じながら何か夢中になっていた時、ややもすると、あとでそれを思い出そうとしても思い出せないような変にむつかしい姿勢をしていることがあるものだが、私の行く手を塞ふさいでいるその人もおそらくそんな時の姿勢をしているのにちがいはなかった。……気がついて見ると私のすぐ傍かたわらにもあった野薔薇

の木を、それが私の見たいと思っっている野薔薇の木のは
んのデッサンでしかないように見やりながら、私はその
ままじっと佇たたずんでいた。——やつとその人影は身を起
し、蝙蝠傘こうもりがさをちよつと持ちかえてから歩き出した。そう
してずんずん霧のなかに暈ぼやけて行つた。

私も歩き出しながら、やつとその野薔薇の小さな茂み
の前に達した。そうして今しがたその人のしていたよう
な難しい姿勢を真似ながら、その上に身を踏こめてみた。
そうすればその人の心の状態までが見透かされでもする
かのように。その小さな茂みはまだ硬かたい小さな荅つぼみを一

ぱいにつけながら、何か私に訴えでもしたいような眼つきで私を見上げた。私は知らず識らずの裡にそれらの蒼を根気よく数えたり、そつと持ち上げてみたりしている自分自身に気がついた。ふとさっきの人のしていた異様な手つきがまざまざと蘇った。そうしてその小さな茂みがマイ・ミクスチュアらしい香りを漂わせているのに気がついたのもそれとほとんど同時だった。湿った空気のためについてまでもそのこんがらかった枝にからみついて消えずにいるその香りは、まるでその小さな茂みそのものから発せられているかのように思われた。——私はい

つもパイプを口から離したことの無いレエノルズさんのことを思い出した。そして今の人影はその老医師にちがいないと思った。そう言えば、さつきから向うの方に霧のために見えたり隠れたりしている赤茶けたものは、そのサナトリウムの建物らしかった。

私は再び霧のなかの道を、神々こうごうしいような薄光りに包まれながら、いくら歩いてもちつとも自分の体が進まないようなもどかしさを感じながら、あてもなく歩き続ていた。私の心はさつき霧の中から私を訴えるような眼つきで見上げた野薔薇のことで一杯になっていた。私はそ

これらの白い小さな花を私の詩のためにさんざん使って置
きなながら、今日までその本物をろくすっぽ見もしなかつ
たけれど、今度こそ、私もそれらの花に対して私のあり
ったけの誠実を示すことの出来る機会の来つつあること
を心から喜んでいた。そしてそのための私の^{よろこ}歡ばしさと
と言ったら、昔の詩人らが野薔薇のために歌った詩句を、
口ずさむなんと言うのではなく、それを知っているだけ
残らず大きな声で^ど呶鳴り^な散らしたいような衝動にまで、
私を駈り立てるのであった。

*

私の書こうとしていた小説の主題は、ようやくその日その日を楽しむことが出来るようになったこんな田舎暮らしの中では、いよいよ無意味なものに思われて来た。それに、そんなものを書くことは、自分で自分を一層どうしようもない破目に陥しおと入れるようなものであることにも気がついたのだ。「アドルフ」の例が考えられた。ああいうものにまで私は自分の小さな出来事を引き揚げたかったのだ。弱気でしかも自我の強いために自分自身も

不幸になり、他人をも不幸にさせたところのアドルフの運命はまた、私の運命さながらに思えたからだ。しかし、

「アドルフ」の作者ほど、そういう弱々しい性格（恐らくそれは彼自身であろうけれど）に対するはげしい憎悪も持っていない、むしろそういう自分自身を甘やかすことしか出来そうもない私がそんな小説の真似なんかしようにものなら、それによって更にもう一層自分自身をも、また他人をも不幸にするばかりであることが、わかり過ぎるくらい私にはわかって来たのだ。……こういうような考え方は、私の暗い半身にはすこし気に入らないよう

だったけれども、この頃のこんな田舎暮らしのお蔭で、そう言った私の暗い半身は、もう一方の私の明るい半身に徐々に打負かされて行きつつあったのだ。

そうして今の私がそれならば書いてもみたいと思うものは、たとえばどんなに平凡なものでもいいから、これから私の暮らそうとしているようなこんな季節はずれの田舎の、人っ子ひとりいない、しかし花だらけの額縁の中へすっぽりと嵌^はまり込むような、古い絵のような物語であつた。私は何とかしてそんな言わば牧歌的なものが書きたかつた。私はこれまでも他人の書いたそういう作品

をずいぶん好きでもあり、そういう出来事に出遇ったと
いうことでその人を羨うらやましくも思つて来たが、私自身
でそう言うものを書いてみようとも、また、書けそうに
も思えなかつた。が、それだけ一層、今の私はそういう
牧歌的なものを書いてみたいと思ひ立つたのである。

——私はしかし、それを書くためには、いま自分の暮ら
しつつあるこの村を背景にするよりほかはなく、と言つ
て一月や二月ぐらゐの滞在中にそういう出来事がはたし
て私の身边に起り得るものかどうか疑わしかつた。
莫ば迦か莫ば迦かしいことだが、私は何度も林の中の空地で無む駄だ

に待ち伏せたものだった。男の子のように美しい田舎いなかの娘がその林の中からひよっこり私の前に飛び出して来はしないかと。……そんな空しい努力の後、やっと私の頭に浮んだのは、あのお天狗てんぐ様のいる丘のほとんど頂近くにある、あの見棄てられた、古いヴィラであった。あのヴィラを背景にして、そこに毎夏を暮らしていた二人の老嬢のいかにも心もとなげな存在を自分の空想で補いながら書いて行く——それなら何んだか自分にもちよつと書けそうな気がした。この間その家の荒廃した庭のなかへ這はい入り込んでそこから一時間ばかり眺めていた高原の

美しい鳥瞰ちようかんず図だの、一かどのニイチェアンだった学生の時分からうろおぼえに覚えていた *weisam* という、いかにもその老嬢たちに似つかわしいドイツ語だのを、ひよつくりと思ひ浮べながら……。

ある夕方、私は再びそのヴィラまで枯葉に埋まった山径を上って行つた。庭の木戸は私がそうして置いたままに半ば開かれていた。私の捨てた煙草の吸殻すいがらがヴェランダの床に汚点しみのように落ちていた。私は日の暮れるまで、そこから林だの、赤い屋根だの、丘だの、それから真正面に聳えている「巨人の椅子」だのを、一々暗記してし

もうほど熱心に見つめていた。……ときどき、こんな夕暮れ時に、二人のうちの私のよく覚えていてる方の神々しいような白髪のお婦人が、このヴェランダの、そう、ちやうど私の坐っているこの場所に腰を下ろしたまま、彼女のとうに死んでいる友人と話し合ってもいると言ったような、空虚な眼まなざしがまざまざと蘇よみがってくる……と
思うと、一瞬間それがきらきらと少女の眼まなざしのようにかがやく……家の中からは夕餉ゆうげの仕度しどをしている、もう一方の婦人の立てる皿の音が聞えて来る……彼女はふと十字を切ろうとするように手を動かしかけるが、それは

ほんの下描きで終ってしまふ……彼女にだけは一種の言語をもつていそうな気のする「巨人の椅子」……そんな一方の老嬢のさまざまな姿だけは、私が実際にそれらを見て、そして無意識の裡うちにそれらを記憶していたのではないかと思えるくらい、まざまざと蘇って来るが、——もう一人の老嬢の方は、いつまでも皿の音ばかりさせていて、容易に私の物語の中には登場して来ようとはしない。私はどうしても彼女のおもかげ 倅おもかげ を蘇らすことが出来ないのである。……

そんなある午後、私のあてもなくさまよっていた眼ざ

しが、急に注意深くなって、私のちようど足もとにある夕日のあたっている赤い屋根の上にとまった。何か黒い小さなものがその屋根の頂きからころころと転ころがって来ては、ひさし庇のところから急に小石のように墜落して行くのだった。しばらく間を置いてはまたそれをやっている。私は何だろうと思って、眼を細くしながら見まもっていた。そうしてそれらが二羽の小鳥であることを認めた。それらが交尾をしながら、庇のところまで一緒に転がって来ては、そこから墜落すると同時に、さあと二また叉またに飛びわかれているのだった。同じ小鳥たちなのか、他のほか小鳥

たちなのか分らないが、それが何回となく繰り返されて
いる。——これは私の物語の中にとり入れてもいいぞ、
と思いながら私はそれを飽^あかずに見まもっている。——
こんな風にして、自分の見つつあるものが自分の構想し
つつある物語の中へそのままエピソードとして溶け込ん
で来ながら、自分からともすると逃げて行ってしまいそ
うになる物語の主題を少しずつ発展させているように見
える……。

アカシアの花が私の物語の中にはいつて来たのもそん
な風であった。その咲き出す頃がちょうど私の田舎暮

しもそのクライマックスに達するのではないかというよ
うな予覚のする、例の野薔薇の苔の大きさや数を調べな
がら、あのサナトリウムの裏の生墻いけがきの前は何遍なんべんも行つた
り来たりしたけれど、その方にばかり気を奪とられていた
私は、そこから先きの、その生墻に代ってその川べりの
道を縁どりだしているアカシアの並木には、ついで注意
をしたことがなかった。ところがある日のこと、サナト
リウムの前まで来かかった時、私の行く手の小径がひど
くいつもと変っているように見えた。私はちよつとの間、
それから受けた異様な印象に戸惑いした。私はそれまで

アカシアの花をつけているところを見たことがなかった
ので、それが私の知らないうちにそんなにも沢山たくさんの花を
一どに咲かしているからだとは容易に信じられなかった
のであった。あのかよわそうな枝ぶりや、せんさい繊細なだえんけい楕円形
の軟やわらかな葉などからして私の無意識の裡に想像してい
た花と、それらが似てもつかない花だったからであつた
かも知れない。そしてそれらの花を見たばかりの時は、
誰かが悪戯いたずらをして、その枝々におびただ夥しい小さな真つ白な
提灯ちようちんのようなものをぶらさげたのではないかと言うよ
うな、いかにも唐突とうとつな印象を受けたのだつた。やっとそ

れらがアカシアの花であることを知った私は、その日はその小径をずっと先きの方まで行ってみることにした。アカシアの木立の多くは、どうかするとその花の穂先が私の帽子とすれすれになるくらいにまで低くそれらの花をぶんぶん匂わせながら垂らしていたが、中にはまだその木立が私の背ぐらいしかなくって、それがほとんど折れそうなくらいに撓しないながら自分の花を持ち耐えている傍などを通り過ぎる時は、私は何んだか切ないような気持ちにすらなった。アカシアの並木はどこまで行っても尽つきないように見えた。私はとうとうある大きなアカシア

を撰^{えら}んでその前に立ち止まった。私は何とかしてこれらのアカシアの花が私に与えたさっきの唐突な印象を私自身^{うな}の言葉に翻訳して置きたいと思ったのだ。それらの花のまわりには無数の蜜蜂がむらがり、ぶんぶん唸り声を立てていた。しかしそれらの蜜蜂は空気のなかでどこで唸っているともつかなかったし、それに私はさっきから自分の印象をまとめようとしてそれにばかり夢中になっていた^{うな}ので、そんな唸り声にふと気づくたびごとに、何んだか私自身の頭脳がひどい混乱のあまりそんな具合に唸り出しているのではないかと言うような気もされた。

⋮

*

その村の東北に一つの峠があつた。

その旧道には縦もみや山毛ぶ櫛ななどが暗いほど鬱うっ蒼そうと茂つて

いた。そうしてそれらの古い幹には藤だの、山葡萄やまぶどうだの、

通草あけびだのの蔓草つるくさが実にややこしい方法で絡からまりながら

蔓延まんえんしていた。私が最初そんな蔓草に注意し出したのは、

藤の花が思いがけない縦の枝からぶらさがっているのに

びっくりして、それからやつとその樅に絡みついている藤づるを認めてからであつた。そう言えば、そんなような藤づるの多いことつたら！ それらの藤づるに絡みつかれている樅の木が前よりも大きくなつたので、その執拗しつような蔓がすっかり木肌にめり込んで、いかにもそれを苦しそうに身もだえさせているのなどを見つめていると、私は無気味になつて来てならないくらいだつた。

——ある朝、私は例の気まぐれから峠まで登つた帰り途、その峠の上にある小さな部落の子供ら二人と道づれになつて降りて来たことがあつた。その折のこと、その子供

たちはいろいろな木に絡まっている、もつと他の山葡萄だの、通草だのをも私に教えてくれたのだった。子供たちは秋になるとそれらの実を採りに来るので、それらのある場所を殆んど暗記していた。それからまた小鳥の巢のある場所を私に教えてくれたりした。彼らは峠で力餅などを売っている家の子供たちであった。大きい方の子は十一二で、小さい方の子は七つぐらいだった。三人兄弟なのだが、その真ん中の子が村の小学校からまだ帰らぬので峠の下まで迎えに行くのだと言っていた。

子供たちは何を見つけたのか急に私を離れて、林のな

かへ、下生えを搔き分けながら駈けこんでいった。そうして一本のやや大きな灌木の下に立ち止まると、手を伸ばしてその枝から赤い実を揉もぎとっては頬張っていた。それは何の実だと訊いたら、「茱萸ぐみだ」と彼らは返事をした。そうして彼らはときどき私の方をふり向いて手招きをしたが、私が下生えに邪魔をされてなかなかそこまで行くことが出来ずにいると、大きい方の子がその実を少しばかり私のために持って来てくれた。私は子供たちの真似をしてそれを一つ宛ずつこわごわ口に入れてみた。なんだか酸っぱかった。私はしかしそれをみんな我慢をし

て嚙^のみ込んだ。そうして子供たちが低い枝にあった実をすっかり食べつくしてしまおうと、今度は高くて容易に手の届きそうもない枝をしきりに手^たぐろうとしては失敗しているのを、私は根気よく、むしろ面白いものでも見ているように見入っていた。

子供たちはまた林の中のいろいろな抜け道を私に教えてくれようとした。そうして急な草深い斜面をずんずん駆け下りて行った。私はそのあとから危かしそうな足つきでついて行った。ほとんどどこからも日の射し込んできて来ないくらい、木立が密生して枝と枝との入りまじって

いるところもあった。かと思ふと急に私たちの目の前が
展^{ひら}けて、ちよつとの間何も見えなくなるくらい明るい林
のなかの空地があつたりした。私たちがそういう林の中
の空地の一つへ辿^{たど}り着いた時、突然、一つの小石がどこ
からともなく飛んで来て私たちの足もとに落ちた。その
飛んで来たらしい方を私たちがまぶしそうに振り向いた
途端、数本の山毛櫨^{ぶな}を背にしなから、ほとんど垂直なほ
ど急な勾配^{こうばい}の藁屋根^{わら}をもつた、窓もなんにもないような
異様な小屋の蔭へ、小さな黒い人影が隠れるのを私たち
は認めめた。それを知つても、しかし、私の小さな同伴者

たちは何も罵ののしろうとせず、かえって私に向って何かその言訣いいわけでもしたいような、そしてそれを私に言い出したものかどうかと躊躇ためらっているような、複雑な表情をして私の方を見上げているので、私は不審そうに、

「あの子は白痴ばかなのかい？」と訊きいた。

子供たちは顔を見合わせていた。それから大きい方の子が低声で私に答えた。

「そうじゃないよ。——あれあ氣ちがいの娘だ」

「ふん、それであんな変な家にいるんだね？」

「あれあ氷倉だ。——あの向うの家だ」

しかしその氷倉だという異様な恰好かっこうをした藁小屋わらこやに遮さえぎられて、その家らしいものの一部分すら見えないところを見ると、おそらく小さな掘立ほったて小屋かなんかに違ちがいなかつた。

「気ちがいつておとつつあんがかい？」

「……」兄も弟も同時に頭を振った。

「じゃ、おつかさんの方だね？」

「うん……」そう答えてから、兄は弟の方を見い見い誰に言うともなく言った。「ときどき川んなかで吠鳴どなっているなあ」

「おれも一度向うの川で見た」弟の返事である。

「向うってどこだ？」

「向うの方だ」弟は何んだか自信のなさそうな、いまにも泣き出しそうな顔をして、ぼくぜん漠然とある方向を私に指して見せた。

「そうか」私はわかったような振りをした。「……おとつつあんは何をしているんだ？」

「木樵きこりだなあ」とこんどはまた兄が弟の方を見い見と言った。

「変なとつつあんだ」弟は顔をしかめながらそれに答

えた。

氷倉の蔭から、再びちらりと小娘らしい顔が出たようだったけれど、私たちの方からはちょうど逆光線だったので、よくもそれを見分けないうちに、その顔はすぐ引っ込んでしまった。それっきりその小娘は顔を出さなかった。ただ私たちはそれから間もなく異様な叫びを耳にした。それはその小娘が私たちを罵のったのか、それとも私たちには見えぬ小屋の中からその小娘に向ってそれが叫ばれたのか、それともまた、その裏の林のなかで山鳩でも啼ないたのだらうか？ともかくも、その得体の知れぬ

アクセントだけが妙に私の耳にこびりついた。——が、私たちは無言のまま、ただちよつと足を早めながら、その空を横切って行った。私たちはそれから再び林の中へ這入った。その中へ這入ると急に薄暗くなったようだけれど、私たちの眼底にはいまの空地の明るさがこびりついているせいか、しばらく私たちの周りには一種異様な薄明りが漂っているように見えた。そんな林の中をずんずん先きになって駈け下りて行く子供たちの跡について行きながら、彼らがいまだに何となく昂奮しているらしいのを、私は漠然と感じていた。そうして、こんな風

に彼らと一緒に峠を下りて行く私は一体彼らにはどんな人間に見えているのだろうか？　とそういう現在の私自身にも興味を持ったりした。

峠を下り切ったところに架かかっている白い橋の上に、小さな男の子が一人、鞆かばんを背負ったまま、しよんぼりと立っていた。私の連れ立っている子供たちがその男の子に同時に声をかけた。彼らを見るとその男の子はにっこりと微笑した。が、私にも気がつくのと、人見知りでもするかのよう、橋の下の溪流けいりゅうの方へその小さな顔をそむけた。私も私で、しばらくその溪流をぼんやり見下ろ

していた。さつき林のなかの空地で子供の一人が漠然と指したそのずっと上流にあたる方を心のうちに描きながら。それから私は三人の子供たちに小銭をすこし^{あた}与えて、彼らと別れた。

*

雨が降り出した。そうしてそれは降り続いた。とうとう梅雨期に入ったのだった。そんな雨がちよつと小止みになり、峠の方が薄明るくなって、そのまま晴れ上るか

と思うと、峠の向側からやっとなんい上って来たように見える濃霧のうむが、峠の上方一面にかぶさり、やがてその霧がさあと一気に駆け下りて来て、たちまち村全帯の上に拡がるのであった。どうかすると、そういう霧がずんずん薄らいで行って、雲の割れ目から堇色すみれいろの空がちらりと見えるようなこともあったが、それはほんの一瞬間きりで、霧はまた次第に濃くなって、それがいつの間にか小雨に変わってしまった。

私はその暗い雲の割れ目からちらりと見える、何とも言えずに綺麗きれな、その堇色がたまらなく好きであった。

そうしてそれは、ほとんど日課のようにしていた長い散歩が雨のために出来なくなっている私にとってには、たとえ一瞬間にもしろそれが見られたら、それだけでもその日の無聊が償ぶりようわれたようにさえ思われた程ほどであつた。

——「おまえの可愛い眼の莖、か……」そんなうろおぼえのハイネの詩の切れっぱしが私の口をふと衝ついて出る。「ふん、あいつの眼が、こんな莖色じゃなくって仕合せというものだ。そうでなかった日にや、おれもハイネのようにこう眩つぶやきながら嘆いてばかりいなきやなるまい。——おまえの眼の莖はいつも綺麗に咲くけれど、

ああ、おまえの心ばかりは枯れ果てた……」

そんな鬱陶うっとうしいような日々も、相変らず私の小説の主題は私からともすると逃げて行きそうになるが、私はそれをば辛抱づよく追いまわしている。私が最初に計画していたところの私自身を主人公とした物語を書くことはとつくに断念していたけれど、私はその代りに、その物語の主人公には一体どんな人物を選んだらいいのか、それからしてもう迷っていた。……どうにか一方の老嬢は私の物語の中に登場させることは出来ても、もう一方の方は台所で皿の音ばかりさせているきりで、いつまで

経^たつてもヴェランダに出て来ようとしなない二人の老嬢た
 ちの話、冬になるとすっかり雪に埋まってしまうこんな
 寒村に一人の看護婦を相手に暮らしている老医師とその
 美しい野薔薇の話、ときどき気が狂って溪^{けいりゆう}流^{りゅう}のなかへ
 飛び込んで罵りわめいているという木樵^{きせう}の妻とその小
 娘の話、——そういうような人達のとりとめもない幻^{イマアジユ}像^{ゾウ}
 ばかりが私の心にふと浮んではふと消えてゆく……

ある午後、雨のちよつとした晴れ間を見て、もうぽつ
 ぽつ外人たちの這入りだした別荘の並んでいる水車の道
 のほつりを私が散歩をしていたら、チエツコスロヴァキ

ア公使館の別荘の中から誰かがピアノを稽古けいこしているらしい音が聞えて来た。私はその隣りのまだ空いている別荘の庭へ這入りこんで、しばらくそれに耳を傾けていた。バッハのト短調の遁走曲フウダグらしかった。あの一つの旋律メロディが繰り返され繰り返されているうちに曲が少しずつ展開して行く、それがまた更に稽古をしているために三四回ずつひとところを繰り返されているので、一層それがたゆたいがちになっている。……それを聴いているうちに、私はまるで魔まにでも憑つかれたような薄気味のわるい笑いを浮べ出していた。そのピアノの音のたゆたいがちな効

果が、この頃の私の小説を考え悩んでいる、そのうちにそれがどうやら少しずつ発展して来ているような気もする、そう言った私のもどかしい気持ちながらであったか

*

ある朝、「また雨らしいな……」と溜息ためいきをつきながら私が雨戸を繰ろうとした途端に、その節穴から明るい外光が洩もれて来ながら、障子の上にくつきりした小さな

だえんけい
楯円形の額縁をつくり、そのなかに数本の落葉松の
ミニユアチュア さか
微細画を逆さまに描いているのを認めると、私は急に
胸をはずませながら、出来るだけ早くと思つて、そのた
めかえつて手間どりながら雨戸を開けた。私が寢床のな
かで雨音かと思つていたのは、それらの落葉松の細かい
葉に溜っていた雨滴が絶えず屋根の上に落ちる音だった
のだ。私はさて、まぶしそうな眼つきで青空を見上げた。
私は寢間着のまま一度庭のなかへ出てみたが、それから
再び部屋に帰り、そしてフラノの散歩服に着換えながら、
早朝の戸外へと出て行つた。私は教会の前を曲つて、そ

の裏手の椽とちの林を突き抜けて行つた。私はときどき青空を見上げた。いかにもまぶしそうに顔をしかめながら。

私が小さな美しい流れに沿うて歩き出すと、その径にずっと笹縁をつけている野苺のいちごにも、ちよつと人目につかないような花が一ぱい咲いていて、それがあつた素晴らしいものものほんの小さな前奏曲プレリュードだと言つたように、私を迎えた。私は例の木橋の上まで来かかると、どういふ積りか自分でも分からずに二三度その上を行つたり来たりした。それから、やつと、まるで足が地上につかないような歩調で、サナトリウムの裏手の生墻いけがきに沿うて行つた。

私は最初のいくつかの野薔薇の茂みを一種の困惑の中
うっかりと見過してしまったことに気がついた。それに
気がついた時は、すでに私は彼らの発散している、そし
て雨上りの湿った空気のために一ところに漂いながら散
らばらないでいる異常な香りの中に包まれてしまってい
た。私は彼らの白い小さな花を見るよりも先に、彼らの
発散する香りの方を最初に知ってしまったのだ。しかし
私は立ち止ろうとはせずになおも歩き続けながら、私は
今すれちがいつつある一つの野薔薇の上に私のおずおず
した最初の視線を投げた。私は、私の胸のあたりから何

かを訴えでもしたいような眼つきで私をじっと見上げて
いる、その小さな茂みの上に、最初二つ三つばかりの白
い小さな花を認めたきりだった。が、その次の瞬間には、
私はその同じ茂みのうちにほとんど二三十ばかりの花
と、それとほとんど同数の半ば開きかかった蒼つぼみとを数
えることが出来た。それはごく僅わずかの間だったが、そん
な風に私が自分の視線のなかに自分自身を集中させてし
まうてからと言うもの、そんなにも簇むらがっているそれら
の花がもう先刻のように好い匂がしなくなってしまうて
いることに私は愕おどろいた。そうして改めてそれを嗅かごう

とすると、そうするだけ一層それは匂わなくなつて行くように見えた。——私は注意深く歩き続けながら、順ぐりにいくつかの野薔薇の木とすれちがつて行つたが、とうとう私はいつかレエノルズ博士がその上に身を踏こめていた一つの茂みの前まで来た。私は思わずそこに足を停とめた。——

そうして私はその野薔薇の前に、ただ茫然ぼうぜんとして、何を考えていたのか後で思い出そうとしても思い出せないようなことばかり考えていた。どれよりも最も多くの花を簇たばがらせているように見えるその野薔薇とそっくりそ

のままのものをどこかで私は一度見たことがあるように
思えて、それをしきりに思い出そうとじていたかのように
でもあった。——それはすこし長い放心状態の後では、
しばしば私にやってくるところの一種独特の錯覚であつ
た。放心のあまりに現在そのものの感じがなくなり、私
は現在そのものをしきりに思い出そうとして焦あせっている
のかも知れなかった。——それから私は再び我に返って
歩き出した。私の沿うて行く生墻には、それらの野薔薇
が、同じような高さの他の灌木かんぼくの間に雑まじりながら、いく
らかずつの間を置いてはならんでいるのだった。あたたか

も彼らがある秘密な法則に従ってそう配置されてでもいるかのよう。そうしてその微妙な間歇かんけつが、ほとんど足が地につかないような歩調で歩きつつある私の中に、いつのまにか、ほとんど音楽の与えるような一種のリズミカルな効果を生じさせていた。……そうしてそれに似たある思い出をこんどはさつきと異って、鮮明に私のうちに蘇らせるのであった。……十年ぐらい前のある夏休みに、私が初めてこの村へ来た時のこと、宿屋の裏から水車場のある道の方へ抜けられるようになって、やつと一人だけ通れるか通れないくらいの、狭い、小さな坂

道を上って行こうとした途中で、私はその坂の上の方から数人の少女たちが笑いさざめきながら駈け下りるようにして来るのに出遇った。私はそれを認めると、そういう少女たちとの出会であいは私の始終夢みていたものであったにも拘かかわらず、私はよつぽど途中から引っ返してしまおうかと思った。私は躊躇ちゆうちよしていた。そういう私を見ると、少女たちは一層笑い声を高くしながら私の方へずんずん駈け下りて来た。そんなところで引っ返したりすると余計自分が彼女たちに滑稽こっけいに見えはしまいかと私は考え出していた。そこで私は思い切って、がむしやらにそ

の坂を上って行った。するとこんどは少女たちの方で急に黙ってしまった。そうしてやっとな笑うのを我慢して、いとも言ったような意地悪そうな眼つきをして、道ばたのちようど彼女たちのせいぐらいある灌木の茂みの間に一人一人半身を入れながら、私の通り過ぎるのを待っていた。私は彼女たちの前を出来るだけ早く通ろうとして、そのためかえって長い時間かかって、心臓をどきどきさせながら通り過ぎて行った。……その瞬間私は、自分のまわりにさつきから再び漂いだしている異常な香りかおに気がついて愕いた。私がそんな風に私の視線を自分自

身の内側に向け出して、ひよいと野薔薇のことを忘れていたら、そういう気まぐれな私を責め訴えるかのように、その花々が私にさっきの香りを返してくれたのだった。そう、それらの少女たちの形づくった生墻はちようどお前たちにそっくりだったのだ！ ……

私はその朝はどうしたのかクレゾオルの匂のぷんぷんするサナトリウムの手前から引返した。その向うには、その思いがけない美しさでひととき私の心を奪っていたアカシアの花が、一週間近い雨のためにすっかり散って、それが川べりの道の上にところどころ一ひとかたま塊りになりな

がら落ちていているのがずっと先きの先きの方まで見透されていた。

それから数日間、こんどはお天気の良い日ばかりが続いていた。毎朝私は起きるとすぐその辺まで散歩に行つた。しかし私はその花をつけた生墻の前にあんまり長いこと立ちもとおっていないで、それに沿うて素通りして来るきりの方が多かった。私は言わば、ただ、その生墻に間歇的に簇むらがりながら花をつけている野薔薇の与える音楽的効果を楽しみさえすればよかつたのであるから。だからある時などは、それのみを楽しむために、私は故意わざ

とよそつぽを見ながら歩いたりした。

ある朝、私はそんな風にサナトリウムの前まで行ってすぐそのまま引っ返して来ると、向うの小さな木橋を渡り、いまその生墻に差しかかったばかりのレエノルズ博士の姿を認めた。すぐ近くの自宅から病院へ出勤して来る途中らしかった。片手に太いステッキを持ち、他の手でパイプを握ったまま、少し猫背ねこぜになって生墻の上へ気づかわしそうな視線を注ぎながら私の方へ近づいて来た。が、私を認めると、急にそれから目を離して、自分の前ばかりを見ながら歩き出した。そんな気がした。私

も私で、そんな野薔薇などには目もくれない者のように、そつぽを向きながら歩いて行った。そうして私はすれちがいざま、その老人の焦点を失ったような空虚な眼差しまなざのうち、彼の可笑おかしいほどな狼狽ろうばいと、私を気づまりにさせずにおかないような彼の不機嫌とを見抜いた。

それから数日後のある朝だった。だんだんに夏らしい色を帯び出して来た美しい空が、私にだけ、突然物悲しく閉とぎされてしまったように見えた。毎朝のようにそれに沿うて歩きながら、しかし、よく注意して見ようとはしないでいた野薔薇の白い小さな花が、いつの間にやらほ

とんど全部蝕むしばまれて、それに黄褐色のきたならしい斑点はんとんがどっさり出来てしまっていることに、その朝、私は始めて気がついたのだった。

*

……数年前までは半分壊こわれかかった水車がごとごと音を立てながら廻まわっていた小さな流れのほとりには、その大抵たいていが三四十年前に外人の建てたと言われる古いバンガロオが雑木林の間に立ちならんでいたが、そこいらの小

径はそれが行きづまりなのか、通り抜けられるのか、ちよつと区別のつかないほど、ややっこしかったので、この村へ最初にやって来たばかりの時分には、私はひとりで散歩をする時などは本当にまごまごしてしまふのだつた。確かに抜け道らしいのだが、その小径は突然外人たちのお茶などを飲んでいるヴェランダのすぐ横を通つたりするのだった。そういう私道なのか、抜け道なのか分からないうようなある小径にまたしても踏み込んでしまった私は、私の背ぐらいある灌木の茂みの間から不意に私の目の前が展ひらけて、そこの突きあたりにヴェランダがあ

り、籐とうの寝椅子に一人の淡青色のヘアフ・コートを着て、
ふっさりと髪を肩へ垂らした少女が物憂ものうげに靠もたれかかっ
ているのを認め、のみならず、その少女が私の足音を聞
きつけてひよいと私の方を振り向いたらしいのを認める
が早いか、私は顔を赤らめながら、その少女をよく見ず
に慌あわててそこから引返してしまった。——その時もし
私わががその少女をもっとよく見たら、それが数日前に私が
宿屋の裏の狭い坂道ですれちがった数人の少女たちの中
の一人であることに気がついて、私の狼狽はもっと大き
かっただろうに。……

この頃刈ったばかりらしい青々とした芝生しばふが、その時にはその少女の坐すわっていたヴェランダをこっちは見えなくさせていた一面の灌木の茂みに代えられて、そうしていま私のぼんやり立っているこの小径からその芝生を真白い柵さくが鮮やかに区限くぎって。……そのように、すべてが変っていた。いま私にまざまざと蘇って来たところの、そう言うような、最初に私が彼女に会った当時の彼女のういういしい面影と、数カ月前、最後に会った時の、そしてその時から今だに私の眼先にちらついてならない彼女の冷やかな面影と、何と異って見えることか！ 彼

女の容貌そのものがそんなにも変ったのか、それとも私
の中にその幻イマアジユ像が変ったのか、私は知らない。しかし
何もかも、おそらく私自身も変ってしまったのだ。……

私はそのとき向うの方から何かを重そうに担にないながら
私の方に近づいてくる者があるのを認めた。それは羊齒しだ
を背負っている宿の爺じいやであった。私はいつか彼の話し
ていた羊齒のことを思い出した。

私は爺やの言うがままに、彼についてその庭の中へお
ずおずと這はい入いって行つた。そうして爺やが庭の一隅にそ
の羊齒を植えつけている間、私は黙ってヴェランダの床

板に腰かけていた。爺やはときどき羊歯を植えつける場所について私に助言を求めた。そのたびごとに、私の胸はしめつけられた。

一通りみんな植えつけてしまうと、爺やは私のそばに腰を下ろした。私の与えた巻煙草を彼は耳にはさんだきり、それを吸おうとはせず、自分の腰から鉈豆なたまめの煙管きせるを抜いた。

私はふだんの無口な習慣から抜け出ようと努力しながら、これもまた機嫌買いらしい爺やを相手に世間話をし出した。

「爺やさん、峠の途中に気ちがいの女がいるそうだけれど、それあ本当なのかい？」

「へえ、可哀そうにすこし気が変なんでございますよ、

——先にはうちでもちよいちよい何かくれてやりましたもので、よく山からにこにこしながら、いろんな花を採って来てくれたりしましたっけが。……ただ、そいつの亭主というのがたいへんな奴でしてね、こっちからわざわざ何か持って行ってやったりしますと、いつも酔払っていちやあ、『くれるというものなら貰もらつといたらいいじゃねえか』と、かかあ嬢の気の毒がるのを叱りつけようて

った調子なんですからね。……それで、こっちでもだんだん情が通かよわなくなつて来て、この頃じゃ、もう、ちつとも構いませんです」

「何だつてね、——その気ちがいつて、ときどき川のなかへ飛び込むんだつてね？」

「へえ、そんな人騒がせなこともとときどきやりますが、あれあどうも少し狂言らしいんで……」

「そうなのかい？　——どうしてまたそんな……」

私はふと口ごもりながら、あの林のなかの空地にあつた異様なかっこう恰好をした氷倉だの、その裏の方でした得えたい体の

知れない叫び声だのを思い浮べた。そうしてそれらのものを今だにこんなにも異常に私に感じさせている、峠の子供たちの不思議な領分の上を思った。——子供たちよ、よし大人たちにはそういう狂行が贗にせものに見えようと、お前たちは、そんな大人たちには鎖とぎされている、お前たちだけのその領分の中で遊べるだけ遊んでいるがよい。

爺やとの話は、私の展開さすべく悩んでいた物語のもう一人の人物の上にも思いがけない光を投げた。それはあの四十年近くもこの村に住んでいるレエノルズ博士が

村中の者からずつと憎まれ通しであると言うことだつた。ある年の冬、その老医師の自宅が留守中に火事を起したことや、しかし村の者は誰一人それを消し止めようとはしなかつたことや、そのために老医師が二十数年もかかつて研究して書いていた論文がすっかり灰燼かいじんに歸したことなどを話した、爺やの話の様子では、どうも村の者が放火したらしくも見える。（なぜそんなにその老医師が村の者から憎まれるようになったかは爺やの話だけではよく分からなかつたけれど、私もまたそれを執拗しつように尋ねようとはしなかつた。）——それ以来、老医師はそ

の妻子だけを瑞西スイスに帰してしまい、そうして今だにどう
 いう気なのか頑固がんこに一人きりで看護婦を相手に暮してい
 るのだった。……私はそんな話をしている爺やの無表情
 な顔のなかに、かつて彼自身もその老外人に一種の敵意
 をもっていたらしいことが、一つの傷のように残ってい
 るのを私は認めた。それは村の者の愚かしさの印しるしであ
 ろうか、それともその老外人の頑かたくなな気質のためである
 うか？ ……そう言うような話を聞きながら、私は、自
 分があんなにも愛した彼の病院の裏側の野薔薇の生墻いけがきの
 ことを何か切ないような気持になって思い出していた。

私はヴェランダの床板に腰かけたきり、爺やがまたどこからか羊歯を運んで来るまで、さまざまな物思いにふけりながら待っていた。それからまた爺やの羊歯を植えつけるのをしばらく見守っていた。しかし今度は黙ったままで。そうして私は老人の動かしている無気味に骨ばった手の甲を目で追っているうちに、ふいと「巨人の椅子」のことを思い浮べた。——私は爺やが羊歯をすつかり植えおえるのを待とうとしないで爺やと別れた。

それから数分後に、私はその巨おおきな岩を目のあたりに見ることのできる、例の見棄てられたヴィラの庭のなか

に自分自身を見出した。そのヴィラに昔住んでいた二人の老嬢のことについては爺やも私に何んにも知らせてくれなかった。「ああ、セエモオルさんですか」と言っただけだった。何か知っていそうだったがもう忘れてしまったらしかった。そうしてただ不機嫌そうに黙っていた。「そうすると、それを知っているのはお前だけだがなあ……」と私は、いま私の下方に横わっている高原一帯を隔てて、私と向い合っている、遥か^{はる}彼方^{かなた}の「巨人の椅子」を、あたかもそのあたりに見えない巨人の姿を探してでもいるかのような眼つきで、まじまじと見まもつ

ていた。

だんだんに日が暮れだした。私のすぐ足もとの、いつかその赤い屋根に交尾している小鳥たちを見出したヴィラは、もう人が住まっているらしく、窓がすっかり開け放たれて、だいたいいろ橙色のカーテンの揺らいでいるのが見えた。ときおり御用聞きがその家のところまで自転車を重そうに押し上げてくるらしい音が私のところまで聞えて来た。もうそろそろ私もこれまでのようにこの空家あきやの庭でぼんやりしていられそうもないなと思った。そんな気がしだすと、何んだかもうこれがその最後の時でもある

かのように、私は、私のすべての注意を、半分はこの荒廃したヴェイラそのものに、半分はこの高みから見下ろせる一帯の美しい村、その森、その花咲ける野、その別荘、それからもう霞みながらよく見えなくなり出した丘々の襞^{ひだ}、それだけがまだ黒黒と残っている「巨人の椅子」などに傾け出していた。それにも拘^{かか}わらず、私はときどきややもするとそれらのものことごとくを見失い、そしてまるっきり放心状態になっている自分自身に気がついて、思わずときつとするのだった。

突然、ちようど私の頭上にある、その周囲だけもうす

っかり薄暗くなっている大きな樅もみの、ほとんど水平に伸びた枝の一つに、ばたばたとびつくりするような羽音をさせながら、一羽の山鳩が飛んできて止まった。そうしてそんなところに私のいることに向うでも愕おどろいたように、再びすぐその枝から、薄暗いために一層大きく見えながら、それは飛び去って行った。あたかも私自身の思惟イデエそのものであるかのごとく重々しく羽搏はばたきながら、そしてその翼を無気味に青く光らせながら……。

夏

突然、私の窓の面している中庭の、とつくにもう花を失っている躑躅つづじの茂みの向うの、別館の窓ぎわに、一輪の向日葵ひまわりが咲きでもしたかのように、何んだか思いがけないようなものが、まぶしいほど、日にきらきらとかがやき出したように思えた。私はやっとそこに、黄いろい麦藁帽子むぎわらをかぶった、背の高い、痩せぎすな、一人の少女が立っているのだということを認めることが出来た。

……誰かを待っているらしいその少女は、さつきから中庭のあちらこちらに注意深そうな視線をさまよわせていたが、最後にその視線を、離れの窓から彼女の方をぼんやり見つめていた私の上に置いた。そんな最初の出会い時には、大概の少女たちは、自分が見つめられていると思う者からわざとそっぽを向いて、自分の方ではその者にまったく無関心であることを示したがるものだが、そんな羞恥しゆうちと高慢さとの入り混った視線とは異って、私の上うへに置かれているその少女の率直な、好奇心でいっぱいのような視線は、私にはまぶしくってそれから目をそら

さずにはいられないほどに感じられたので、私はそのときの彼女——最初に私の目の前に現れたときの彼女について、そのやや真深かにかぶった黄いろい帽子と、その鍰つばのかげにきらきらと光っていた特徴のある眼まなざしとよりほかには、ほとんど何も見覚えのないくらいであった。……やがて別館から彼女の父らしいものが姿を現した。そしてその二人づれは私の窓の前を斜めに横切って行ったが、見ると、彼女はその父よりも背が高いくらいであった。そしてその父らしいものが彼女にしきりに話しかけるのに、彼女はいかにも気がなさそうに返事をし

ながら、いつまでも私の方へ躑躅の茂みごしにその特徴のある眼ざしをそそぎつづけていた。……その二人が中庭を立ち去ってしまった跡も、私はしばらく、今しがたまでその少女が向日葵ひまわりのように立っていた窓ぎわの方へ、すこし空虚うつろになった眼ざしをやっていたが、ふと気づくと、そこいらへんの感じが、それまでとは何んだかすっかり変ってしまったのだ。私の知らぬ間に、そこいら一面には、夏らしい匂いが漂い出しているのだ。……

その日の夕方の、別館の方への私の引越し、（今まで

私の一人で暮らしていた、古い離れが修繕され始めるので――その次ぎの日の、その少女の父の出発、それから他にはまだ一人も滞在客のないそんな別館での、その少女と二人っきりの、背中合わせの暮らし……。

しかし私は毎日のように、ほとんど部屋に閉じこもったきりで、自分の仕事に没頭していた。その私の書きつつある「美しい村」という物語は、六月頃からこの村に滞在している私が、そんなまだ季節はずれの、すっからかんとした高原で出会ったことを、それからそれへと書いて行ったものだった。そうして私はちようどいま、私

がそれまで昔の恋人に対する一種の顧慮から、その物語の裏側から、そしてただ、それによってその淡淡とした物語にある物悲しい陰影ニユアンスを与えるばかりで満足しようとしていた、この村での数年前の彼女たちとの花やかな交際の思い出、ことにこの村での彼女たちとの最初の歡そろばしい出会いを、とある日、道ばたに咲き揃そろっている野薔薇の花がまざまざと私のうちに蘇らせ、それが遂に思いがけぬ出口を見つけた地下水のように、その物語の静かな表面に滾こん々と湧わきあがってくるところを書き終えたばかりのところだった。そうしてそういう昔のさまざま

な歡ばしい出会いの追憶に耽^{ふけ}っている暇もなく、すでに私から巣立っていったそれらの少女たち、ことにそのうちの一人との気まずい再会を恐れて、季節に先立ってこの村を立ち去ろうとする、そんな私の悲しい決心を、その物語の結尾として、私はこれから書こうとしているところだった。

私の新しい部屋は、別館の二階の奥まったところで、南向きの窓があり、そしてその窓からは数本の大きな桜の幹ごしに向うの小高い水車の道に面しているいくつかのヴィラの裏側がちらちらと見えていた。そしてその窓

のすぐ下を、私がそれらの少女たちと初めて出会ったところの、例の抜け道が、小さな坂になりながら、灌木のなかに細々と通っているのだった。……私は私のやりか
けている仕事から気持ちをそらすまいとして、私とたった
二人きりでその別館の中に暮らしだしているその未知の
少女とは、わざと背中を向き合わせてばかりいた。その
癖、私は私の窓のすぐ下を通っているその坂道を、毎朝、
一定の時刻に、絵具箱をぶらさげながら、その少女が水
車の道の方へと昇ってゆくのを見逃したことはなかつ
た。ちようど、午前中のその時刻の光線の具合で、木洩こも

れ日びがまるで地肌を豹ひょうの皮のように美しくしている、その小さな坂を、ややもすると滑りそうな足つきで昇つてゆくその背の高い、瘦やせぎすな後姿うしろすがたを見送りながら、その上の水車の道に出て、さて、それから彼女はどの小径をどう通つて、どんな場所へ絵を描きに行くのだろうか、かと、そこいらの林のなかの小径が実にややこしく、私自身も初めてこの村へ来た当時は、何度も道に迷つてしまつたくらいではあつたし、それにまたそんなことからして一人の少女と私との奇妙な近づきが始まつたりしたので、私は、絵を描く場所を捜しながらそんな見知らぬ

小徑をさまよっているらしい彼女のことを、何となく気づかわしく思っていた。

*

しかし私は最初のうちはその少女を、ただ、そんな風に私の窓からだの、あるいは廊下などでひよつくり擦れ^すちがいざま、目と目とを合わせないようにして、そつと偷^{ぬす}み見ていたきりであった。そんな具合で、私は彼女の顔を、まだ一度も、まともに眺めたことがなく、それに私

の見たときは、いつも静止していないで、しかもそれぞれに異った角度から光線を受けていたせいか、見るたびごとに、その顔は変化していた。ある時は、そのやや真深かにかぶった黄いろい麦藁帽子の下から、その半陰影のなかにそれだけが顔の他の部分と一しよに溶け込もうとしないで、大きく見ひらかれた眼が、きらきらと輝いていた。またそんな帽子をかぶらずに、庭園の中などで顔いっぱい強い光線を浴びながら、まぶしそうにその眼を半分閉ざしているおかげで、平生の特徴を半分失いながら、そしてその代りにその瞬間までちつとも目立た

ないでいた^{くちびる}唇だけが^{いちぢり}苺のように鮮かに光りながら、ほとんど前のとは別の顔に変わってしまった。

そのうちに私たちがやっとな短い会話を取り交わすようになり、それと共に、しばしば、私は彼女の顔をまともから眺めるようになったのにも拘らず、彼女の顔がなおも絶えず変化しているのに愕いた。ある時は、その顔はあんまり血色がよく、すべすべしているので、私のためらいがちな視線はいくどもその上で空滑り^{からすべ}をしそうになった。また他の時はすこし疲れを帯びたように沈んで、不透明で、その皮膚の底の方にはなんだか堇色のような

ものが漂っているように見えた。そうかと思うと、その皮膚がすっかり透明になり、ぽうつと内側から蔷薇色を帯びているようなこともあった。ときどき以前に見たのとどこか似たような顔をしていることもあった。が、その顔は決して二度と同じものであることはなかった。

ある日のこと、私は自分の「美しい村」のノオトとして悪戯いたずら半分に色鉛筆でもって丹念に描いた、その村の手製の地図を、彼女の前に拡げながら、その地図の上に万年筆で、まるで瑞西スイスあたりの田舎にでもありそうな、小さな橋だの、ヴィラだの、落葉松の林だのを印しつけな

がら、彼女のために、私の知っているだけの、絵になり
そんな場所を教えた。その時、私のそんな怪しげな地図
の上に熱心に覗き込んでいる彼女の横顔をしげしげと見
ながら、私は一つの黒子ほくろがその耳のつけ根のあたりに浮
んでいるのを認めた。その時までちっともそれに気がつ
かないでいた私には、何んだかそれはいま知らぬ間に私
の万年筆からはねたインクの汚点しみかなんかで、拭ふいたら
すぐとれてしまいそうに思えたほどだった。

翌日、私は彼女が私の貸した地図を手にして、早速さっそく私
の教えたさまざまな村の道を一とおり見歩いて来たらし

いことを知った。それほど私の助言を素直に受入れてくれたことは、私に何んとも言いようのない喜びを与えた。

*

そんな村の地図を手にして、彼女がひとりで散歩がてら見つけて来た、あるささやかな溪流のほとりの、蝙蝠傘こうもりがさのように枝を拵げた、一本の縦もみの木の下に、彼女が画架を据えている間、私はその画架の傍から、数本のアカシアの枝を透しながらくつきりと見えている、程遠くの、

真っ白な、小さな橋をはじめて見でもするように入っていた。それは六月の半ば頃、私が峠から一緒に下りてきた二人の子供たちと別れた、あの印象の深い小さな橋であった。——私は、彼女がしやがみながら、パレットへ絵具をなすりつけ出すのを見ると、彼女の仕事を妨さげることとを恐れて、そこに彼女をひとり残したまま、その溪流に沿うた小径をぶらぶら上流の方へと歩いて行つた。しかし私は絶えず私の背後に残してきた彼女にばかり気をとられていたので、私の行く手の小径の曲り角の向うに、一つの小さな灌木が、まるで私を待ち伏せてで

もいたように隠れていたのに少しも気づかずに、その曲り角を無雑作に曲ろうとした瞬間、私はその灌木の枝に私のジャケットを引っかけて、思わずそこに足を止めた。見ると、それは一本の花を失った野薔薇だった。私はやつのことで、その鋭い棘とげから私のジャケットをはずしながら、私はあらためてその花のない野薔薇を眺めだした。それが白い小さな花を一ぱいつけていた頃には、あんなにも私がそれで楽しんでいた癖に、それらの花がひとつ残らずどこかに立ち去ってしまった今は、そんな灌木のあることにすら全然気づこうとしなかった私に対して、

それが精一杯の復讐ふくしゅうをしようとして、そんな風に私のジャケットを噛み破ったかのようにさえ私には思えた。……そういう花のすっきり無くなった野薔薇をしばらく前にしながら、私はいつか知らず識らずに、それらの白い小さな花のようにどこへともなく私から去っていった少女たちのことを思い出していた。……この頃、ともすると、一人の新しい少女のために、そんな昔の少女たちのことを忘れがちであったが、そう言えば、彼女たちがこの村においておいおいとやって来る時期ももう間ぢかに迫っているのだ。彼女たちが来ないうちに私はこの村を

さつと立ち去ってしまった方がいい。そうしなくっちゃいけない。——そう自分で自分に言つて聞かせるようにしながら、その一方ではまた、この頃やつと自分の手に這^は入りかけている新しい幸福を、そうあっさりと見棄てて行けるだろうかどうかと疑つていた。そうして私は自分の気持をそのどちらにも片づけることが出来ずに、自分で自分を持って余しながら、かれこれ一時間近くもその山径をさまよつていた。そうしてその挙^{あげ}句、私がやつと気がついた時には、そんな風に歩きながら自分でも知らずに何度も指で引張つていたものと見えて、私の鼠色の

ジャケットの肩のところに来たその小さな綻ほころびは、もう目立つくらいに大きくなっていた。——私はとうとう踵きびすを返して、再び溪流づたいにその山径を下りてきた。そうして私は自分の行く手に、真っ白な、小さな橋と、一本の大きな蝙蝠傘のような樅の木を認めだすと、私はすこし歩みを緩ゆるめながら、わざと目をつぶった。その木蔭になって見えずにいるものを、私のすぐ近くに、不意に、思いがけぬもののように見出したかったのだ。……とうとう私は我慢し切れずに私の目を開けてみた。しかし彼女は私からまだ十数歩先きのところにいた。そうし

てその木蔭にしゃがみながらそれまでパレットを削けずって
いたらしい彼女が、その時つと立ち上って、私にはすこ
しも気がつかないように、描きかけのキャンバスを画架か
らとりはずすと、それを道ばたの草の上へいかにも投げ
やりに、乱暴なくらいにほうり出したところだった。ほ
うり出された大きなキャンバスは、しかしひとりでにふん
わりとなりながら、草の上へ倒れて行った。それを見る
と、私は彼女のそばへ駈けつけた。

「僕が持っていて上げよう」

「いいわ……いつもひとりでするんですから」

「意地わる！」

「意地わるでしょう」

私は彼女とそんな風に子供らしく言い合いながら、無理にキャンバスを引つたくと、それを自分の肩にあてがいながら、彼女と並んで村の街道を宿屋の方へと歩いて行った。ときおり私たちは散歩をしている西洋人や村の子供たちとすれちがった。彼らのもの珍らしそうな視線は私たちを——ことにまだこの村に慣れない彼女を気づまりにさせているらしかった。私は私で、そういう彼女をつとめて気軽にさせようと思って、私の空いている方

の手を自分の肩の上へやりながら、

「ほら、こんな穴が出来ちやっただ……さっき一人で散歩しているとき野薔薇にひっかかったのさ」

そう言って、その肩の穴がもつと大きくなるのも構わずに、それをよく彼女に見せようとして、自分のジヤケツを引張って見せたりした。そうして私はこんなにまで私と打ち解け合っているこの少女を振り棄てて、自分ひとりこの村を立ち去るなんぞということは、到底出来そうもないと考え出していた。

*

私の「美しい村」は予定よりだいぶ遅れて、ある日のこと、やつと脱稿した。すでに七月も半ばを過ぎていた。そうして私はそれを書き上げ次第、この村から出発するつもりであったのに、私はなおも、そういう一人の少女のために、一日一日と私の出発を延^のばしながら、私がその物語の背景に使った、季節前の、気味悪いくらいにひっそりした高原の村が、次第次第に夏の季節^{シーズン}にはいり、それと同時にこの村にもぼつぽつと避暑客たちが這^は入^いり

込んでくるのを、私は何んだか胸をしめつけられるような気持で、目のあたりまに迎えていた。

私はしばしばその少女と連れ立って、夕食後など、宿の裏の、西洋人の別荘の多い水車の道のあたりを散歩するようになっていた。そんな散歩中、ときおり、一月前までは私と一しよに遊び戯れたりしたことさえある村の子供たちと出会うようなこともあったが、彼らは私たちの傍そばを素知らぬ顔をして通り抜けていった。もう私を覚えていないのだろうか、それとも私がそんな見知らない少女と二人づれなのを異様に思っってそうするのだろうか

か？ ……しかしそれらの子供たちも、そのうちだんだんに、そんな林の中で最初のうちは私たちのよく見かけたものだった、さまざまな小鳥などと共に、その姿をほとんど見せないようになった。そしてその代り、私たちとすれちがいがいながら、私たちに好奇的な眼まなざしを投げてゆく、散歩中の人々や、自転車に乗った人々などがだんだんに増ふえて来た。それらの中には私と顔見知りの人たちなども雑まじっていた。私はいつかこんなところをひよつくり昔の女友達にでも出会いはしないかと一人で気を揉もんでいたが、ときどき、そんな散歩の途中に、ふと向う

からやってくる人々のうちに遠見がどこかそれらに似たような人があつたりすると、私は慌あわてて、その人たちを避けるために、道もないような草の茂みのなかへ彼女を引っ張りこんで、何んにも知らない彼女を駭おどろかせるようなこともあつた。

そんな風に、私は彼女と暮方近い林のなかを歩きながら、まだ私が彼女を知らなかった頃、一人でそこいらをあてもなく散歩をしていたときは、あんなにも私の愛していた瑞スイス西式のバンガロオだの、美しい灌木だの、羊歯だのを、彼女に指して見せながら、私はなんだか不思議

な気がした。それらのものが今ではもう私には魅力もな
んにも無くなってしまっていたからだ。そうして私は彼
女の手前、それらのものを今でも愛しているように見せ
かけるのに一種の努力をさえしなげればならなかった。

それほど、私自身は私のそばにいる彼女のことので一ぱい
になってしまっているのだった。……そうしてそんな薄
ぐらい道ばたなどで、私は私の方に身をもた寄せかけてそれ
らのものをよく見ようとしている彼女のしなやかな肩へ
じっと目を注ぎながら、そつとその肩へ私の手をかけて
も彼女はそれを決して拒こばみはしないだろうと思った。そ

して私はある時などは、その肩へさりげないように私の手をかけようとして、彼女の方へ私の上半身を傾けかけた。私の心臓は急にどきどきしだした。が、それよりもっとはげしく彼女の心臓が鼓動しているのを、その瞬間、私は耳にした。そしてそれが私に、そういう愛撫あいぶを、ほんのそのデッサンだけで終らせた。……私はまだその本物を知らないのだけれど、それが与えるのとちつとも異ちがわないような特異ユニイクな快さを、そのデッサンだけでもう充分に味ったように思いながら。

*

一体、「水車の道」というのは、郵便局やいろんな食料品店などのある本通りの南側を、それとほとんど平行しながら通っているのだが、それらの二つの平行線を斜^{はす}かに切っている、いくつかの狭い横町があった。そんな横町の一つに、その村で有名な二軒の花屋があった。二軒とも藁屋根の小さな家だったが、共に、その家の五六倍ぐらいはあるような、大きな立派な花畑に取り囲まれていた。そしてその二つの花畑を区切って、いつも気

持のよいせせらぎの音を立てながら流れているのは、数年前まで、そのずっと上流のところでごとごとと古い水車を廻転させていたところの、あの小さな流れであった。そしてその一方の花畑などは、水車の道を越して、さらにその道の向うまで氾濫はんらんしていた。……つい先頃までは、あんなにどこもかしこも花だらけであったこの村では、この二軒の花屋は、ほとんどその存在さえ人々から忘れられていたくらいであったが、やがてその季節が過ぎ、それらの野生の花がすっかり散って、それと入れ代りに今度は、これらの畑で人工的に育て上げられた、さまざま

まな珍らしい花が、一どにどつと咲き出したものだから、その横町を通り抜ける者は誰しもその美しい花畑ひとみに眸をみはらないものはないくらいであつた。だが、その二軒並んだ花屋の前を通りすがりに、注意をしてそれらの店の奥に坐っている花屋の主人たちに目を止めた者は、一層の愕きのためにその眸をもつと大きくせずにはいられなかつたであらう。と言うのは、その一方の店の奥にきよとんと坐っている白い碁盤ごばんじま縞のシャツを着た小柄な老人を認めたとのち、次の花屋の前にさしかかると、何んとその奥にも、つい今しがたもう一方の奥に見かけたば

かりのと寸分も異ちがわない、小柄な老人が、やはり同じよ
うな白い碁盤縞のシャツを着て、きよとんと腰をかけ、
往来の方を眺めているのに気づくだらうからだ。ただ異
うのは、そんな二人のそばに坐っているのが、一方はい
つも髪かみの毛をくしゃくしゃにさせた、肥ふとっちよの女房で
あつたし、もう一方はそれと好対照をしているくらいに
瘦やせつぽちの、すこし藪やぶ睨にらみらしい女房であることだ。
つまり、その二軒の花屋の老いたる主人たちは、ほとん
ど瓜うり二つと云つていいほどの、兄弟なのであつた。その
上、可笑おかしいことには、この花屋の兄弟はとても仲が悪

くて、夏場だけはお互に仲好さそうに口を利き合いながら商売をしているが、さて夏場が過ぎてしまうと、すぐに性懲りもなく喧嘩をし始め、冬の間などは、お互に一言も口を利かずに過ごすようなことさえあると言うことだった。——そんな風変りな二軒の花屋のある横町には、道ばたに数本の小さな縦と楓かえでとが植えられてあったが、その一番手前の小さな楓の木に、ついこの間のこと、「売物モミ二本、カエデ三本」という真新しい木札がぶらさげられた。そしていまや、その横町の両側の花畑には、向日葵ひまわりだの、ダリヤだの、その他さまざまの珍らしい花

が真っさかりであつた。……

私はそんな二軒の花屋の物語を彼女に聞かせながら、その私の大好きな横町へ、彼女の注意を向けさせた。

水車の道の上へ大きな枝を拵げている、一本の古い桜の木の根元から、その道から一段低くなっている花畑の向うに、店の名前を羅馬字ロオマジで真白にくり抜いた、空色の看板が、さまざまな紅だの黄だのの花とすれすれの高さに、しかしそれだけくつきりと浮いて見えている。——
そんな角度から見た一軒の花屋の屋根とその花畑を、彼女はある日から五十号のキャンバスに描き出した……。

しかしその水車の道はそのへんの別荘の人たちが割合に往き来するので、彼女のまわりにはすぐ人だかりがして困るらしかったが、私は一遍もその絵を描いている場所へ近づこうとはしないでいた。そんな人目につき易い^{やす}場所で私が彼女と親しそうにしているのを、私の顔見知りの人々に見られたくなかったからだ。で、私は自分の部屋に閉じこもったきりで、この頃やっとな書き上げたばかりの原稿へ最後の手入れをし続けていた。(しかし、その間一番余計に私の考えていたのは、やっぱり彼女のことであった。) — が、私はその花屋を描いていると

ころを遠くからなりと、一度見て置きたいと思つて、あ
る朝、宿屋の裏の坂を上りながら水車の道まで出ていつ
て見た。そうして私は、その道の向うの、大きな桜の木
の下に立って、パレットを動かしている彼女と、それか
ら彼女の横からその画布を覗き込みながら、一人のベレ
帽をかぶった若い男が、何やら彼女に話しかけているの
を認めた。私はそんな男が早く彼女のそばを立ち去つて
くれればいいにと、すこしやきもきしながら、待ってい
た。――

「誰れ？」

「いまの人……」やつとその男が立ち去つたの

を見ると、私は急いで彼女の方へ近づいて行きながら、いかにも何気なさそうに訊きいた。

「画家えかきさんなんですって……何んだか、あんまりいつまでも見ていらっしやるんで、私、厭いやになっちゃった……」

彼女はわざとらしく顔をしかめて見せた。それからすこし恐こわいような眼つきをして花畑の一部を見つめだした。熱心に絵を描こうとしているときの彼女が、こんな男のような、きびしい眼つきになるのを私はよく知っていたものだから、私はそれっきり黙っていた……。

そんな風に、私がちよつとでも彼女から離れている間

に、私なしに、彼女がこの村で一人きりで知り出して
るすべてのものが、私に漠^{ぼく}として不安を与えるのだった。
ある日、彼女は、昔はそこに水車場があつたと私の教え
た場所のひとりで、しばしば、背中から花籠を下ろして、
松葉杖に靠^{もた}れたまま汗を拭いている、跛^{ちんば}の花売りを見
かけることを私に話した。彼女の話すようなものをつい
ぞ見かけたことのない私には、そんな跛の花売りのよう
なものと彼女がしばしば出会うことすら、自分でも可笑^{おか}
しいくらい、気になってならなかつた。

*

ある朝、私は私の窓から彼女が絵具箱をぶらさげて、裏の坂を昇ってゆくのを見送った後、そのまんまぼんやり窓にもたれていると、しばらくしてからその同じ坂を、花籠を背負い、小さな帽子をかぶった男が、ぴよこんぴよこんと跳ねるような恰好かっこうをして昇ってゆくのが認められた。よく見ると、その男は松葉杖をついているのだ。ああ、こいつだな、彼女がモデルにして描きたいと言っていた跛ちんばの花売りというのは！ ……そういう後姿だ

けではよくわからなかったが、その男は、この村の花売り共が大概よぼよぼの老人ばかりなのに、まだうら若い男らしかった。それが一層片輪の故にそんな花売りなんかしていることを物哀れに感じさせた。——そうして、その悲しげな跛の花売りを、私は自分自身の眼で見知るや否や、彼女がその姿を絵に描いてみたいと言っていただけでもって、その跛の花売りに私の抱いていた、軽い嫉妬しつとのようなものは、跡方あとかたもなく消え去った。……

しかし、数日前水車の道で彼女に親しげに話しかけていたところを私の目撃した、あの画家だという、ベレ帽

をかぶっていた青年は、その顔なんか明瞭めいりょうには覚えて
いなかったが、それだけ一層、その男の漠ぼくとした存在は、
何かしら私を不安にさせずにはおかなかった。彼女はそ
の画家のことはそれっきりに何んにも私に話さなかつた
が、ひよつとしたら彼女はそれまでに何遍なんべんもその画家に
出会っており、そして私の知らない間に互に親しくなり
だしているのではないかと云うような懸念けねんさえ私は持ち
はじめていた。そうしてある日のこと、そういう私の懸
念を一そう増させずにはおかないような出会いを私たち
はその画家としたのだった。——やっとな彼女が花屋の絵

を描き上げたので、次の絵を描く場所を捜すために、あ
る晴れた朝、私は彼女と一緒に、すこし遠いけれど、サ
ナトリウムの方へひさしぶりで出かけてみることにし
た。私たちが、小さな集りのあるらしい、少人数の西洋
人の姿が窓ごしにちらちら見える、教会の前を通りぬけ
て、その裏の、いつも人気のない椽とちの林の中へはいろう
とした途端、私たちの行く手の、その林のなかの小径を
ば、一人の男が、帽子もかぶらずに、スケッチ・ブック
らしいものを手にしながら、ぶらぶらしているのを私た
ちは認めた。「いつかの画家さんよ……また、お会いし

たわ」——彼女にそう注意をされるまでは、私はその男が、この頃何の理由もなく私を苦しめ出している、そのベレ帽の画家と同じ男であることには気づかなかつたくらいであった。それほど私はその画家については何んにも見覚えがなかったのだ。私は、私たちの方へぶらぶら歩いてくるその男からは、つとめて私の視線をはずしながら、急に早口にとりためもないことを彼女に話し出した。私は彼女が私の話に気をとられてその男の方へはあんまり注意しないようにと仕掛けたのだ。しかし彼女は私の言うことには何んだか気がなさそうにこた応えるだけで

あった。そして彼女は、私がそばまなにいるのでひどく曖昧あいまいにされたような好意に充ちた眼まなざしで、その男の方を見つめていた。少くとも私にはそんな気がした。すると、その男の方でも、私の知らないこの前の出会いの際に、彼女と交換した親しげな視線の続きとでも言ったような意味ありげな視線を彼女の方へ投げかけながら、そして思い出し笑いのようなものをふいと浮べながら、軽く会え釈しやくをして、私たちのそばを通り抜けて行った。

私はなんだか急に考えごとでもし出したかのように黙り込んだ。私たちはその椽とちの林を通り抜けて、いつか小

さな美しい流れに沿い出していた。しかし私はいま自分の感じていることがどこまで真実であるのか、そんなことはみんな根も葉もないことなんじゃないかと疑ったりしながら、気むずかしそうに沈黙したまま、自分の足もとばかり見て歩いていった。そうして私は、そんな自分の疑いに対するはつきりした答えを恐れるかのように、いつまでも彼女の方を見ようとはしないでいた。が、とうとう私は我慢し切れなくなってそんな沈黙の中からそつと彼女の横顔を見上げた。そして私は思ったよりももつと彼女がその沈黙に苦しんでいるらしいのを見抜いた。

そういう彼女の打ち萎しおれたような様子は私には溜たまらな
いほどいじらしく見えた。突然、後悔のようなもので私
の胸は一ぱいになった。……私がほとんど夢中で彼女の
腕をつかまえたのは、そんなこんがらかった気持の中で
だった。彼女はちよつと私に抵抗しかけたが、とうとう
その腕を私の腕のなかに切なそうに任せた。……それか
ら数分経ってから初めて、私はやつと自分の腕の中に彼
女がいることに気がついたように、何んともかんとも言
えない歓ばしさを感じ出した。

私たちは、少しぎごちなさそうに腕を組んだまま、例

の小さな木橋を渡った。それからその流れの反対の側に沿って、サナトリウムへの道に這入はいって行った。その途中にずっと続いている野薔薇の生墻いけがきは、すでにその白い小さな花をことごとく失った跡だった。そんな葉ばかりになってしまっている野薔薇の茂みは、それらが花をいっぱいつけていた頃のことを、ほとんど強制的に私に思い出させはしたけれど、私はそれがどんなになっていようとも、もうそれには少しも感動できなくなっていた。それほどあの頃からすべてが変っていた。そしてそれが何もかも自分の責任のような気がされて、私はふっと気が

鬱^{ふさ}いだ。……が、それらの生墻の間からサナトリウムの赤い建物が見えだすと、私は気を取り直して、黄いろいフランス菊がいまを盛りに咲きみだれている中庭のずつと向うにある、その日光室^{サン・ルウム}を彼女に指^さして見せた。ちようど、その日光室の中には快癒^{かいゆ}期の患者らしい外国人が一人、籐椅子に靠^{もた}れていたが、それがひよいと上半身を起して、私たちの方をももの憂^うげな眼ざしで眺め出した。

——それから私たちは、なおもその流れに沿って、そこいらへんから次第にアカシアの木立に縁どられだす川沿いの道を、どこまでも真直に進んで行った。それらのア

カシアの花ざかりだった頃は、その道はあんなにも足触りが軟やわらかで、新鮮な感じがしていたのに、今はもう、あちこちに凸凹ができ、汚きたならしくなり、何んだかいやな臭いさえしていた。その上、それらのアカシアの木立は、まだみんな小さいので、はげしい日光から私たちを充分に庇かばうことが出来ないのです。その川沿いの道はそれまでの道よりも一層暑いように思えた。私たちは途中からそれらのアカシアの間をくぐり抜けて、ちようどサナトリウムの裏手にあたる、一面に葦よしの這っている、いくぶん荒涼とした感じのする大きな空地へ出た。そこから

は、村の峠が、そのまわりの数箇の小山にいによう圍繞されながら、私たちの殆んど真向うに聳そびえていた。——梅雨期には、その頃の私自身の心の状態のせいだったかも知れないが、その奥には何かしら神秘的なものがあるように思えてならなかった。その峠も、いまは何物をも燃やさずにはおかないような夏の光線を全身に浴びながら、何んだか炎のようにゆらめいているような感じで、私たちに迫っていた。……

彼女は、その燃ゆるような山なみを、サナトリウムの赤い屋根を前景に配置しながら、描いてみたいと言った。

そしてそれを適当な角度から描くために、そんなはげしい光線の直射するのにも無頓著のように、その空地のやや小高いところを選ぶと、三脚台を据えて、その上へ腰かけ、斜めにかぶった運動帽の下からときどきまぶしそうな顔を持ち上げながら、その下図をとりだした。……私は彼女の仕事の邪魔にならないように、いつものように彼女をそこに一人きり残しながら、再びさっきの土手に出て、やや大きなアカシアの木蔭を選んで、そこに腰を下ろしていた。そうして私の前の小さな流れの縁を一羽の鵲せきれいが寂しそうにあっちこっち飛び歩いているのに

ぼんやり見入っていると、突然、私の背後のサナトリウムの方からその土手をうんうん言いながら重たそうに荷車を引いてくる者があるので、私は道をあげようとして立ち上った。見ると、それは一台の塵芥車ごみぐるまだった。私は、とんでもないものがこんなところを通るんだなあと思いつつながら、道ばたの灌木の中へすつぽりと身体を入れながら、よそつぽを向いていた。が、その塵芥車がやっと私の背後を通り過ぎたらしきので何気なくちらりとそれへ目をやると、その箱車のなかには、かんづめ罐詰の罐やら、とう唐もろこしの皮やら、英字新聞の黄ばんだのやら、草花の枯

れたのやらが、一種汚らしい美しさで、ぎっしりと詰まっていた。そしてその車の通った跡には、いつまでも腐った果物に似た匂いが漂っていた。……私はこんな塵芥車のようなものにも、いかにもこの外国人の多い村らしい独得な美しさのあるのを面白がって、それをちよつと見送った後、再びさっきのアカシアの木蔭へぼんやり腰を下ろしていると、ものの数分と経たないうちに、私はまたしても私の背後へ近づいてくる車の音でもって、立ち上らなければならなかった。それもまた、前のとそつくり同じような、塵芥車だった。そしてそれから小一時

間ばかりの間に、私はこの土手を通りすぎる同じような塵芥車を、ほとんど十台ぐらい数えることが出来た。

——どこかこの先きの方にも、きつとこの村の芥棄てごみす場があるんだなと、それにはじめて気がつくや否や、いな私はやつとのことと、このサナトリウムの土手がこんな凹凸になり、汚らしくなっている原因にも気がつきだした。そうしてそれとほとんど一緒に、もうこんなこの村には沢山の外国人がはいり込んでいるのかなあと思いつながら、私はすこし呆氣あつけにとられたように、いましがた私の背後を通り過ぎて行ったばかりの、その最後の塵芥

車をいつまでも見送っていた。……

暗い道

「どっちへ向いて行くんだか、私にはちつとも分らないわ」彼女はいくらか上ずったような声で言った。

「実は僕にも分らなくなっちゃったのさ……」私はそう返事をしながら、彼女の方を見やったが、その白い顔の輪廓がもうほとんど見分けられないくらいの暗さになり

だしていた。実際私自身にもこんな風やまみちに私たちの歩いて
いる山径の見当がちよつと付きかねていたのだけれど、
私はわざとそれを冗談のように言い紛らわせていたのだ
った。

——その日、私が私の「美しい村」の物語の中に描い
た、二人の老嬢たちのもと住まっていた、あの見棄てら
れた、古いヴィラの話を彼女にして聞かせると、それを
しきりに見たがったので、私自身はもうそんなものは見
たくもなかったのだけれど、その荒れ果てたヴェランダ
から夕暮れの眺めがいかにも美しかったのを思い出し

て、夕食後、ともかくもそのヴィラまで登って行ってみることにした。おそらくあの家はまだあのまんまになっているだろうと予想しながら。……が、だんだんそのヴィラが近づいてくるにつれ、私は何んだか急にそんな自分の夢の残骸ざんがいのようなものを見に行くのが厭いやな気がし出したので、そろそろ日が暮れかけて来たのをいい口実に、まだ山径がこれからなかなかたいへんだからと言って、私たちはその途中から引返すことにした。——その帰り途、私はその代りに、まだ彼女が知らないというベルヴェデエルの丘の方へ彼女を案内するため、いましがた

登ってきたのとは異った山径を選んでいるうちに、どう道の間違えたのか、そのへんからもう下り道になってもよさそうな時分だのに、いつまでもそれが爪先つまさき上りになっ
ていて、私たちはその村の中心からはますます反対の方へ向いつつあるような気がしてきた。まだこの村にこんな私の知らない部分があることを心のうちでは驚きながら、しかし私はそのへんをいかにも知り抜いているように装いながら、さっさと彼女を導いて行った。が、私たちはともすると無言になるのだった。……いつのまにやらもうすっかり日が暮れていた。私たちの歩いてい

る道の両側の落葉松などが伸び切って、すこし立て込んでいたりすると、私はほとんど彼女の着ているワンピースの薔薇色さえ見さだめがたいくらいであつた。ただときどき彼女の肩が私の肩にぶつかるので、自分の傍に彼女を近ぢかかと感じながら歩いていった。そうかと思うと、木立の間からだしぬけにその奥にあるヴィラの灯あかりが下枝ごしに私たちの肩に落ちて来て、知らず識しらずに身をすり寄せていた私たちを思わず離れさせた。——そんなヴィラの数がだんだん増え出して来たらしいことが、いくらか私たちをほっとさせていた。……

突然、私は心臓をしめつけられたように立ち止まった。私はそれらのウイルスに見覚えがあり出すのと同時に、これをこのまま行けば、私がこの日頃そこに近寄るのを努めて避けるようにしていた、私の昔の女友達の別荘の前を通らなければならぬことを認めただ。そして私は、その一家のものが二三日前からこの村に来ていることを宿の爺じいやから聞いて知っていたのだ。しかしもうさんざん彼女を引つ張りまわした拳あぐく句だったし、私もかなり歩き疲れていたの、この上廻り道をする気にはなれず、私は心ならずもその別荘の前を通り抜けて行くことにし

た。……だんだんその別荘が近づいて来るにつれ、私は
ますます心臓をしめつけられるような息苦しさを覚えた
が、さて、いよいよその別荘の真白な柵さくが私たちの前に
現われた瞬間には、その柵の中の灯りの一ぱいに落ちて
いる芝生しほふの向うに、すっかり開け放した窓枠まどわくの中からは、
私の見覚えのある古い円卓まるテエブル子の一部が見え、その上には、
人々が食事から立ち去ってからまだ間もないと言ったよ
うに、丸められたナプキンだの、果物の皮の残っている
皿だの、珈琲茶碗コオヒイだのが、まだ片づけられずに散らかっ
たまま、まぶしいくらい洋燈ランプの光りを浴びてきらきらと

光っているのを、私は自分でも意外なくらいな冷静さをもって認めることが出来た。いい具合にそこには誰も居合わさなかつたせいか、それともまたそれは、その瞬間までに、私のなかの不安が、すでにその絶頂を通り越してしまっていたせいであつたらうか？　ともかくも、私はかなり平静に近い気持で、ただちよつと足を早めたきりで、その白い柵の前を通り過ぎることが出来た。……そんな私の心のなかの動揺どうようには気づこうはずがなく、彼女は急に早足になった私のあとから、何んだか怪訝けげんそうについて来ながら、

「まだ、なかなか？」とすこし不安らしく私に声をかけた。

「うん……ますます見当がつかないんだ」

「そんなことばかり言って……」彼女はそんな私の本気とも冗談ともつかないような態度にとうとう腹を立てたように見える。そうしてそんな私を非難するような口吻で、

「早く帰らない？」と言った。

「じゃ、一人でお帰りなさい」と私はいまはもう微笑らしいものさえ浮べながら返事をした。

「意地わる！」

「だって、ほら、そこ知っているでしょう？」と私は、私たちの行く手の暗がりの中に小さなせせらぎが音立っているのを指しながら、「水車の道じゃないの？」と快活そうに言った。「まあ、本当に……」と彼女はまだ何んだかそれが信じられないと言った風に自分の周囲を見廻わしていた。私たちはすでに、林のなかを抜け出して、昔、水車場のあつた跡に佇たたずんでいたのだった。——そこで道が二股ふたまたに分かれて、一方は「水車の道」、もう一方は「本通り」へと通じていた。どっちからでも、もう

すぐその宿屋へは帰れるのだが、水車の道の方からだと例のかなり峻けわしい坂道を下りなければならなかったので、私たちは本通りの方から帰ることにした。で、その後者の道をとって、その突きあたりから本通りの方へ曲ろうとした途端に、私は、その本通りの入口の、ちやうど宿屋の前あたりから、ぽうつと薄明るくなりだしている圏わの中に、五六人、一かたまりになった人影がこちらを向いて歩いてくるのを認めた。私はどきっとして立ち止まった。どうやらそれが私の昔の女友達どもらしく見えたからだ。……私は急に、私のそばにいる彼女の腕を

とつて、向うから苦手にがての人が来るらしいので捕つかまると面倒くさいからと早口に言訣いいわけしながら、いま来たばかりの水車場の方へ引つ返していった。そうして再びさっきの小川の縁ふちに並んで立ちながら、その人たちがそのまま本通りの方から来るか、それとも宿屋の裏の坂を抜けてくるか、どっちから来るだろうと、両方の道へ注意を配っていた。……そしてそつちにばかり注意を奪われていたので、私たちは、私たちの背後の、いましがたそこから私たちの出てきたばかりの林の中から、数人のものが懐中電気を照らしながら、出てくるのには全然気がつかず

にいた。突然私たちはその懐中電気のまぶしい光りを浴びせられた。私たちはびっくりしてその小川の縁を離れた。……しかし懐中電気を手にしていた男の方でも、そんなところに思いがけず私たちが突っ立っていたのに、面喰めんくらったらしかったが、その一人が私だと気がつくのと、「××君じゃない？」と私の名前をためらいがちに言った。そう言われて、私が一層驚いて、まぶしそうに顔をしかめながら振り向いて見ると、それは私の学生時代からの友人であった。それと同時に、私はその友人の背後に、若い女たちが二三人、まだ不審そうに闇を透かしな

がらこちらを見つめているのに気がついた。それはその友人の若い妻君や妹たちであつた。私は彼女たちにちよいと会釈をして、それから気まり悪そうに微笑しながら、

「なあんだ、君たちか！——いつ、こつちへ来たの？」
「昨日来た。さつき君のところへ寄つたら留守だと言うんで、それから細木さんのところへ行つて見たんだ。あそここの家もみんな出払っているんだ……」

私はその友人の言葉を聞き終えるか終えないうちに、本通りの方の曲り角から一かたまりの人影がこつちへ曲つて来だしたのを認めた。

「じゃあ、構かまわないから、僕んところへ寄って行けよ」
そう言い棄てて、私はさっさと一人で水車の道の方へ
歩き出した。そうして私は二三のヴィラの前を通り過ぎ
てから、その先きの、真っ暗だけれど、私には勝手の知
れた、草ぶかい坂道をずんずん一人先きに降りていった。
やがて他の連中も、そんな私の後から一塊りになって、
一箇の懐中電気を頼りにしながら、きやつきやつと言っ
て降りて来た。……

「まあ、こんな道あるの、私、ちつとも知らなかった
わ」

坂の途中で、友人の若い妻君がそんなことを誰にともなく言ったらしいのが、もうその時はその小さな坂を降り切ってしまったっていた私のところまで、手にとるよう^{まじ}に聞えて来た。私はちようど、その友人の妻君も確か数年前にその坂道で私の出会った少女たちの中に雑^{まじ}っていたことを思い出すともなく思い出していたところだった。

——その出会いは私にはあんなにも印象深いのに、かつてのその少女たちの一人であった彼女の方では、（おそらく他の少女たちも同様に）そんな私との出会いのことなどは少しも気に留めていないで、すっかり忘れてしま

っているのかなあと思った。が、一方ではまた何んだか、そんなことを言っただけで彼女が私をからかっているのじやないかしら、とそんな気もされた。ひよいと彼女の口を衝いて出たらしいそんな言葉を私はひとりで気にしながら、いつまでもそっぽを向いて皆の降りてくるのを待っている、突然、そのうちの誰かが足を滑らして、「あっ！」と小さく叫んで、坂の中途にどさりと倒れたらしい気配がした。見上げると、その坂の中途にまだ転がっているらしいものがまるで花ざかりの灌木のように見えた。そして他のものがみんな立ち止まって、その一番最

後に降りてきた少女の方をふり返っているのを、私はただぼかんとして眺めながら、その場を一步も動こうとしないです突っ立っていた。そうして私は毎朝のようにこの坂を昇り降りしているあのちんば跛の花売りのことをひよっくり思い浮べ、あいつはまた何だってこんなあぶなっかしい坂道をわざわざ選んで通るのだろうかしらと、全然いまの場合とは何んの関係もないようなことを考え出していった。……

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館